

羅振玉と日本との関係序説

——羅繼祖輯述『永豐鄉人行年録』を読む——

梅 溪 昇

一、まえがき——大正八年六月羅振玉送別会写真をめぐる——

筆者は一九八九年一月―三月、佛敎大学四条センターにおける「京都の近代史を歩く」講座を担当し、その第一回として同年一月三十日、「栗田口―青蓮院の療病院址」を取り上げた。この京都療病院創立関係者の一人に木村得正氏があり、たまたま当時、祖考および先考木村得善氏の関係史料を探しておられた京都市左京区南禪寺下河原町二八にご在住の木村潔先生（和歌山医科大学名誉敎授）にそれを機に知遇をえることになった。筆者が京都に來た外国人について関心を抱いていることを申し上げたところ、同先生は早速に同年三月八日付書翰で、御所藏の大正八年（一九一九）六月二十一日円山公園左阿弥庭園における羅振玉氏送別会の写真二葉、先考の詩集『超然樓詩存』の「送羅叔言歸支那」の詩を送って下さるとともに、先考が羅氏に洛約十年の間、同家族の健康を護られたことに対し「超然樓」の額が羅氏より贈られて來たこと（先生ご自身、先考の処方されたお薬を羅振玉氏の居宅へたびたび届けられたとのことである）、また先生は、一九二八年昭和三八月、京大陸上部と満鉄陸上部の対抗戦が大連で行われたさい、京大陸上部の顧問として同行され、先考の命で同地の羅氏宅を訪問したことなどを教えて下さつ

た（このとき、羅振玉先生には会われず羅繼祖氏に会われたようである。）

さきの羅氏送別会に關しては、意外と記事は少なく、大阪毎日新聞は大正八年六月十九日付にて「京大図書館に寄附されし羅氏邸、羅振玉氏廿二日出発」と題して、

「今回帰國に決したる前北京大学長羅振玉氏のために京大の荒木総長、内藤、松本其他の教授發起にて二十一日午後一時より京都也阿弥ホテル送別宴を張るべし、因に氏は二十一日夜神戸に赴き一泊、二十二日午前十一時熊野丸にて帰國の途に上るべし、同氏が住み馴れし洛北浄土寺町の邸宅は一切を挙げて京大図書館に寄附した」と

という予報の記事を載せているだけである。筆者に寄せられた木村潔先生所藏の羅氏送別会写真二葉のうち、羅氏を囲む總計三十八人の集合写真の裏には木村得善氏自筆の各氏名が次のごとく認められ、当日の参加者の顔ぶれを知ることができる（写真参照）。

（最前列向つて右より）江上瓊山・榊原鉄硯・畠山八洲・荒木寅三郎・富岡鉄斎・羅振玉・犬養木堂・上野理一・山本悌二郎・小川爲次郎・高田忠周

（中列向つて右より）

長尾雨山・榊亮三郎・高瀬武二郎・内藤虎次郎・佐伯理一郎・松本文三郎・羅福保・羅福成・狩野直喜・西村時彦・小川琢治・彙文堂大島友直・原田大観

（後列向つて右より）

磯野秋渚・黒木鉄堂・桑原隲藏・近重直澄・田中慶太郎・滑川濬如・山本竟山・河井蒼廬・高野竹隱・濱田耕作・柚木梶雄・鈴木虎雄・木村得善・小川忠次郎

あとの一葉は、向つて右より内藤湖南（虎次郎）・富岡鉄斎・羅振玉・犬養木堂・長尾雨山である（写真参照）。

また、先考の木村得善（号、擇堂）氏が羅氏に贈った詩は、その詩集『超然樓詩存前編』二十六丁に次のごとく収められている。

送羅叔言婦支那

東海濯纓去逍遙、永慕園佳所心存浴淨、樂歌覺采薇尊著述、殷禮行藏懷漢恩、臨歧情不盡梅雨灑殘樽

右に述べた一連の在京都時代の羅氏関連史料にはじめて接した筆者は羅氏の京都におけるわが国学者らとの人的交渉および羅氏と近代日本との関係を少しく掘り下げて研究調査したい衝動にかられるに至った。そこで少しく羅氏をめぐる関係文献に注意を払ったが、余り成果はなかった。中国の近現代史研究に暗い筆者の思い違いかも知れないが、「保皇派」として辛亥革命を避けて日本に亡命し、のち日本軍閥と結んで満州国建設に関与しているため、今日の政治情勢では、日中両国の現代史研究者の間では、羅氏に関する研究関心がきわめて低いように感じられた。しかし、筆者は、政治外交面で羅振玉は昭和史にとって関係深く、また近代学術研究上の貢献、日中文化交流史上の役割も看過することができないと考える。

ところで本年に入り、年来昵懇にして頂いている小野沢うばら女史が渾南田の絵画の研究調査のため、大連の羅振玉の嫡孫羅繼祖氏宅を訪問されることを聞いて、訪問のさいには、京都の木村潔先生が、先考らの羅氏送別会の写真を所持され、筆者が同先生からその写真を頂いたのを機に、羅氏と日本との関係について関心を有していることを是非お伝え頂きたいと頼んでおいた。同女史は、本年十月中旬、羅繼祖氏に面会され、右の件をお伝え頂いたが、継祖氏は木村潔先生のことを懐しく思い出され、自著の『永豊郷人行年録』（羅振玉年譜）に木村先生あての献呈の辞を書かれて手紙とともに同女史に託された。右の羅繼祖氏の小野沢女史宛の手紙の文面には、次のごとく記されている。

「小野沢女史惠覧

前者辱枉顧寒舍、送到木村先生託見贈、《圓山公園錢別照片》祇領之下、非常感謝。寒家与木村先生三世故交、憶小生在京都出生時、木村擇堂先生親為接産、嗣後寒家有病時、都是擇堂先生為之診療、擇堂先生博雅能詩、蓋儒醫也。四十年代小生在京都市、曾親訪擇堂先生嗣君博士叙舊交、不覺已逾五十年矣。人事遷流、回顧誠不勝悵悵。奉託携去拙著《永豐鄉人行年録》一冊、想已轉致木村先生矣。……………衰齡重八兼之耳聾、已是不出戸、現值寒冬、更蟄居不敢出矣。專此奉謝、敬頌文祺

羅繼祖拜啓

一九九一年一月二〇日

以上のような経緯で、筆者ははじめて羅繼祖輯述『永豐鄉人行年録』（羅振玉年譜）のあることを知った。これは、一九八〇年南京で初刊、のち台北で再版、さらに一九九〇年四月京都中文出版社から増補版初版が発行されている。以下、本小稿においては木村潔先生の御厚意により、大正八年六月の京都における羅振玉送別会写真を日中文化交流史上の貴重史料として紹介するとともに、羅氏と日本との関係を考察する端緒として羅繼祖輯述『永豐鄉人行年録』（羅振玉年譜）を読んで、その日中関係部分を摘訳し、今後の日本側史料研究調査の手がかりとしたい。

二、羅繼祖輯述『永豐鄉人行年録』（羅振玉年譜）摘訳

『年譜』は、一八六六年清同治五年丙寅（日本、慶応二年）一歳に始まるが、日本関係記事の初見は一八九四年清光緒二十年甲午（日本、明治二十七年）二十九歳の時である。

一八九四年（清光緒二十年、日本明治二十七年）二十九歳

○本年日韓交渉が起こり、中国軍は韓国を援けた。羅振玉は、戦局を憂え、毎日海陸の地図を広げて観察しな

がら、中国は大軍を山海関に集め、もつて北京を防衛することはできるが、沿海の兵備は至つて空虚である。日本軍が実を避けて虚を突き、まず中国の海軍を襲えば、中国は全面的に敗けるであらうと憂えた。これを聞く者は皆一笑に附して、それは嘘だとした。しかし、劉鉄雲だけはその通りだとした。鉄雲は才能秀れ何物にも縛られない性格で、治水家として有能な人物で、その時ちょうど彼は父を亡くして、淮水にいた。日本軍は果せるかな金州復州より海上のもやをついて兵を進めたので、中国海軍は潰滅した。ここにおいて羅氏の説を笑つた者もその先見の明を賞揚した。

一八九六年（清光緒二十二年、日本明治二十九年）三十一歳

○日清戦争後、中国国民は疲弊したので、羅振玉は農業は国の本であり、昔は人びとは官吏をやめると農業に従事したことを思い、そこで農業研究を志した。既に斎民要術・農政全書・授事通考の諸書を勉強していたが、また西洋農書の訳本を読み、新農法は収穫を増加させると語つたが、残念ながらその言は詳かではない。本年の春には、蔣伯齊と相談して上海に学農社を創立し、欧米、日本の農書を購入して、これを中国語に訳して、研究の資料とした。上海に到着後、農報館を設立し、翻訳者を招聘し、書物・雑誌を訳させ、みずからその加筆・削除にあたり、伯齊は庶務を総べた。

一八九八年（清光緒二十四年、日本明治三十一年）三十三歳

○五月一日、羅振玉はじめて東文学社を上海新馬路梅福路に創設し、学生募集規則をつくつた。時に農社は日本人藤田劍峰（豊八）を引き入れて農書を訳せしめ、その成績は頗るよかった。羅振玉の云うには、中日両国はともに唇齒の国であり、お互に親善をはかり、ともに西洋諸国の力が東漸して来るのを禦がなければならな

いと云い、劍峰はこの言を正しいとした。羅振玉は、凡そ日本の学者で中国に來遊する者のための仲介者となり、言葉を通じさせようと謀った。ここにおいて学社を設立して学生を入学させ、劍峰に教務をまかせ、農館（農社）がその校費を支弁することにした。羅振玉は伯斧と共に農社のことに繁忙であるため、邱于蕃を挙用して、校務につかせたが、当時は日本語を教授する者がいなかったものである。以上の処置によつてはじめて一般の評判がよくなり、入学者が大勢になった。そこで劍峰のほかに田岡嶺雲や上海の日本副領事の諸井および書記船津辰一郎を義務教員に任命した。○八月には政変があつて、校費の出どころがなく、邱于蕃も上海を離れたため、生徒は三分の一に減少した。

一八九九年（清光緒二十五年、日本明治三十二年）三十四歳

○学社が日本那珂通世著『支那通史』を影印し、羅振玉がこの序文をつくつた。（文章は王靜安の代作。）

○四月、第四子の福葆が生まれた。○殷の卜骨が始めて洹濱より出土し、玉文敏の所得するところとなつた。

○本年始めて日本の内藤湖南（虎次郎）と知り合い、ともに會稽に遊び、禹穴を探り、四明に至つて范氏の天一閣藏書を訪れた。別れにのぞんで去るに忍び難いものがあつた。

一九〇一年（清光緒二十七年、日本明治三十四）三十六歳

○冬十一月四日、羅振玉は両江・湖廣両總督の命を奉じて、教育事務視察のため日本に渡つた。隨行者として、両湖書院監院劉聘之（洪烈）、自強学堂漢教習陳士可（毅）・胡千之（鈞）・田伏侯（吳超）・左立達（金孝）・陳次方（間感）ら六人。当日午前九時神戸丸に乗船出航し、翌日長崎着、七日下関着、八日神戸着、九日午前十一時東京着。京橋区西紺屋町五番清淨軒旅館に寄寓した。そこは古城（江戸城）址に対し、老松が羅列する風景絶好の地

であり、旅館もまた柱・机いずれも立派で塵一つなかった。十三日になってまた麹町区永田町二丁目二十八番地に寓居を移した。家は山の頂きにあり、頗る浄爽であった。十八日体調が悪いので箱根に赴き温泉に入った。そこでは塔之澤の福住楼に寓居したが、そこは山腹にあり、泉声が驟雨のようであり、身心ともに爽快であった。かつ四周山に抱かれ、樹木は鬱蒼とし、山肌が壁のごとく切り立ったところにも美しい松の翠りがあった。

二十一日麹町の寓居へ帰る。三十日、足の病気で横浜の医院へ行き、脚氣と診断され、薬を飲んだが大した効果がなかった。そこでまた医家小西氏および漢方医浅田（恭悦）氏（浅田氏は名医浅田宗伯の子、日本の代々漢方医）にかかったが、皆脚氣ではないと言った。結局、水虫病とわかり、服薬して次第に快癒した。遂に日本にあつて越年した。これは教育のほかに財政についても調査に当たったためであった。財政は百務の根元であり、財政が良好でなければ万事頽廢し、教育もまた振興できない。

一九〇二年（清光緒二十八年、日本明治三十五年）三十七歳

○一月三日東京を発し、翌日午前九時十分京都着、柊家に宿泊した。六日奈良に赴き、対山楼旅館にとまり、七日の昼、車で大阪に至り、北川旅館にとまり、八日神戸に至り、博愛丸に乗船、風静かにして浪もなく、快適であった。九日は風雨強く、船は非常に揺れ、夜長崎に到着した。岸に登り長崎農事試験場を見ると、大麦小麦をおのおの畦を分けて秩序正しく試植していた。また同時に柑橘園や暖房、分析室などを視察した。帰国の船は台風に遭い、半日静臥を余儀なくされた。十二月中ごろ上海に帰着した。この旅行は二か月と八日間できわめて短時日であったが、接触した日本人は近衛公爵（篤磨）、長岡子爵（護美）、文部大臣菊地、外務大臣小村、貴族院議員伊澤（修三）、高等師範学校校長嘉納（治五郎）、普通学部部长澤柳、日本中学校校長杉浦（重剛）、視

察した学校は、東京にある農科大学・高等師範学校・私立女子職業学校、京都では第三高等学校・師範学校・高等女子学校・美術工芸学校・清美尋常小学校である。およそ日本人の考究するところを学び、寓居に帰り、すぐさま燈火をつけて記録した。○山陽の張郁斎(紹文)は、当時江寧にいた。羅振玉は筆記草稿を浄書して「扶桑兩月記」を書き上げ、みづからその序文に、「在日わずかに二か月のみ……短日月にして言語も通ぜず、従つて事実と隔りがあることも多いかも知れないが、その叙述するところ、言葉は意を達するにあり、感得するに従つてこれを記したもので、道理に反してはいない。……」とあり、郁斎の跋文には、「記するところは日本の教育の本質にふれること掌に指すがごとくである。かつ財政・政治・風俗に関しても考察するところ詳細である。本書を一覧すれば、日本について何んでもよくわかる。著者は若くして意を撰述に用い、その著書は等身大の多きに至っている。壮年に至り現代の制度に関心を寄せ、常に現状を慷慨し、激しく談じ口論するので、流俗の士は多くこれを避けている。近年はもっぱら農学と教育の二者に専念し、この両者が政治の根本であると頻りに世間に訴え、現代中国の厄運を挽回せんと願ひ、その言論は天下に行きわたっている。本書もその一班をなすものである。」と。かつ日本の尊攘時代の教育家福澤諭吉に対比できる。この書は、光緒壬寅(二十八年)三月教育世界社石印本にして張郁斎の手写にかかる。その中には顯著な議論が多く、かつ逸事も収められている。それらを以下に記しておく。

「客言を聞くに、日本では去年商船学校の卒業航海において、出発後間もなく沈没して学生数十人が行方不明となった。この成績大不良にもかかわらず、これよりあと入校者数はかえって以前にくらべて多くなった。ここに日本人の勇猛にして学に励み、失敗を恐れないことを知ることができ、まことに敬すべく、畏るべきものがある。」「今日、理材を論ずる者が依然として商は末富であるという言説に固執して、農税を増加して、むしろ商税を取ることをやめるように主張するのは大きな誤りである。農工商の三者は同じく国家財政上枢要なもの

である。これを人身に譬えると、農は咽喉、工は胃腑、商は大腸である。もし咽喉無病にして飲食が胃に入り、しかも大腸が壅塞していれば胃は消化せず、咽喉もまたひとり養生の功をとげることができない。この理は浅近にして容易に知ることができにもかかわらず、多くの人びとがこの理に暗いのは解しがたい。」「予は以前友人と、人間と禽獸との區別は、外界の力を用いるか、自分一己の力を用いるかにあると論じたことがある。禽獸の力は、わずかに爬牙の利、羽翼の豊かさ、蹄足の速さを恃んでいるのみである。人間は、糸布をもって夜服をつくり、金鉄を鑄て武器とし、牛馬を使いこなし早く走り、知識を世界に求めることができる。思うに人間は、一身の力だけでは限りがあり、外界の助けを借ると、その力は無限である。世に事業を成功させ、學問を達成しようとする者は、皆外界の力の助けを借らなければ不可能である。いわんや天下を治める者に於ておや。」「日本の実業はその方法において各国を師としている。製茶・養鶏は皆中国人を招聘して教習し、鉛製活字印刷機器もまた薩摩藩が藩士を上海に派遣して購入したもので、現在その技術の精巧さは中国の上に出ている。また聞くところによると、医術中の按摩法は、西洋にははじめなかったが、オランダ人がその法を日本より収得してから始めて欧州に伝えられた。今の西人の按摩法は、かく遠く日本を通じてきたものである。冰寒青勝 前事を師とすべし。わが国人も日本人の勉学の旗印を恥とせず學問を進めなければならぬ。」「

「日本婚姻の制を考えるに、おおよそ男子は三十にして娶り、女子は二十にして嫁す。但し離婚する者多く、故に夫婦間の道徳は頗る悪化している。その統計報告によると、明治三十二年間に結婚数はおよそ男女二九万七一一七組、そして同年の離婚者は男女六万六四一七組、また私生児の数もまた少くない。明治三十一年についてみると、その公生男女は各六十余万人、私生児の数は男女各五万余人。」「日本赤十字社は規模甚だ宏大で、近年社員数はすでに五七万に達した。これは日本文明の一大徴証である。中国古代のことを考えると、すでにこの制度に似たものがある。司馬遷は『たとえ敵者でも傷者には医薬を与える。』と言っている。また宋の襄公

は、君子は重傷させず、老人を擒にせず、相手の軍隊が隊列が整わなければ戦いを始めないものであると語っている。しかし、この言葉はきつと司馬遷の言葉の中にあるもので、襄公がこれを利用したものであろう。古人は引用にあたってたいいその出典を明らかにしないものである。襄公は決して仁者ではない。その平生をみれば、人を犠牲としたもので、どうしてこのようなことを語ることができようか。これは古代においてはひとしく、軍人を一視同仁に救護したことがあった証拠である。かの捕虜の首を斬るの制度は、おそらく夏殷周三代の末期ごろから行われたものであろう。このことを記して歴史家に質すものである。」

「京都疏水は、琵琶湖の水を導き、三山をくり抜いて高地を越えて田に水を引くもので、凡十余里の長さである。その高地の雨水断絶の箇処に、電力を用いて鉄索を引っ張り、それによって舟を陸上に曳き上げる。このようにして琵琶湖の水を京都に通じている。丁度、中国の堰（おせき）を過ぎることく、往来は絶えることがない。

聞くとところによれば、この事業をはじめて唱えた者は京都府知事某君で、当時世間に嘲諷の声が高かった。しかし、その水路が完成するに至って大いに利便が生まれた。今、農民が鍍金で某君の像をつくり、記念としている。およそ人民というものは、成功を樂しむことには賛成するが、物事を始めようとするのにはなかなか賛成しにくいものである。これは中外古今皆同じである。」視察の間に、書店を見てまわり、たびごとに異本を購入したが、昔のごとく多くなかった。大雲書庫所藏梵唐千字文、影宋本三因方、祖庭事苑、食医心鑑、影元本儒門事親、影宋本本事方後集、濟生統方、備急灸法、唐六典、列子盧齋口義、森立之が紙をあてて模写した唐の新修本草残本はこの時の購入である。而して梁の李羅注千字文の著が日本図経に記録されているが、實際は偽書である。このたびの旅行でまた河井荃盧（仙郎）・日下部鳴鶴（東作）と知り合い金石学について従横に話し合った。二人は日本の雅士であり、鳴鶴の書名が最も有名である。なお、この旅行で記すべきことが三事あ

り、それらは羅振玉の晩年の著『集蓼編』に見える。

一九〇九年（清宣統帝元年、日本明治四十二年）四十四歳

五月、役所の命を奉じて日本に赴き農学を調査す。端午後一日（五月六日）范緯君（婦弟、兆経）を連れて北京を離れ天津を過ぎ、九日塘沽に赴く。十日正午塘沽より営口丸に乗船して東行。翌日朝、芝罘に至り、夕暮に大連に着く。茶商人にこの地における日本の情況を問うところ、頗る安静ではあるが、侮辱を受けることも少くないという答えであつた。また、地方の裁判について問うと、小事件は地方で裁判し、大事件は旅順にある日本人裁判官が裁判するとのことであつた。十五日門司港に入り、十六日神戸に着き、午後六時京都に到着し、麴屋町繹文旅館に滞在した。京都大学長前文相菊池大麓に会い、菊池の曰く、「大学の修業は僅に、三、四年にして真正の修学は卒業以後にあり、卒業してから学校に留めて教師に任じることができる。凡そ新理新説は皆参考に用い、その教学期間内は皆すべて修学の時期で、かくてまたその上に社会の閱歴が加わる。現代の大人物はその中から輩出する。今、貴国では学生が卒業した時、多くの場合、各自が学んだ所に就かせず、漫然と職務を与える。そのため、卒業時非常に高かつた成績も、日に日に衰亡して行くのみである。」と。羅振玉はその論の精確なることに感嘆した。このとき内藤虎次郎・桑原隲蔵・狩野直喜・富岡鉄斎に会つたが、皆日本の硯学である。また、藤田劍峰にも邂逅した。連日の長雨のうえに、また各大学までは卒業の時期で多忙であつた。農科大学の規定では、陰曆七月十五日以後なれば参観者の接待が可能であつたので、時日を惜しみ、廿五日札幌に着き、山形屋に寓居した。廿七日農科大学を訪問した。佐藤昌介校長は、「設備は初め三十万円と定められていたが、今は六十万円に達している。経常費は毎年二十万円で、文部省の支出と農場収入とは各半分である。臨時費は固定し難い。」と語つた。その教室には、普通校教室一、化学実験室二、林学教室一があり、各

一教室毎に器械室がついている。ほかに教員室、蔵書室、また植物標本室があつてその数は五万種にのぼる。その学校の演習林はおよそ三カ所、互いに遠く離れている。翌日再び学校に赴いて養蚕、昆虫教室、第一・第二農場、製乳室、農具室を参観し、山東よりの留学生牛献周が山東沂水呉出土の三葉虫の化石を見せてくれた。廿八日は、もともと北海道牧場を参観する約束になっていたが、当事者が不在で中止した。

華僑の許士泰に会ったが、彼の言うには、「日本の農租は次第に増加しており、明治四十年に納入された所有税は一〇四〇余円、昨四十一年は更に増加して一七〇〇余円である。また最近、食塩は政府の専売となり、その価格はほとんど砂糖と等しい。」と。また「日ごろ北海道を開拓するには、二十年納税し、一畝ごとの開荒費は約三、四円である。」と言う。午後、八田博士と一緒に眞駒の種畜場を参観した。八田は日本の動物学専攻の学者で、その種畜場は明治九年より経営を開始し、次第に規模を拡大し、牛、馬、羊、鶏を所有し、馬牛種はすべて良好で、母牛は仔牛を産んで七ヵ月を経ても毎日一斗二升の乳が出る。廿九日、函館に帰り、北辰館に滞在した。六月一日、海を渡り青森に着き、改めて汽車に乗り、二日後に上野に到着した。東京の新聞が羅振玉のことを非難していると田伏侯が語ったので、何を非難しているのかと尋ねたところ、「古いものを好み、沢山所蔵している。」と、羅振玉はこれを一笑に附した。四日、駒場の（農科大学を参観し、同校の毎年経費を聞く、十五万円と言う。臨時費は毎年文部省より支出され、画一ではない。農林二教室、および林産物試験所、養蚕室、農具場等を観る。養蚕室においていろいろな試験が行われているのをみた。桑葉にどんな色を塗れば、蚕がどんな色の糸を吐くかといったことであるが、それより先きのことは聞けなかった。五日、駒場の農芸化学および獣医の両講堂、図書閲覧室を参観。八日、日本の吉金文学会員とともに上野鶯亭において後藤学士が酒を飲みながら演説しているのをみて、羅振玉は田中教堂（慶太郎）に通訳を頼んで応答し、主客ともに歓を尽した。会員の高田忠周は、その著書『説文段注疏稿』を提示したが、その内容は三篇、すでに二百冊で、羅振

玉はその勇氣に感嘆した。廿日東京より帰国。廿一日京都に着き、夜神戸に至る。廿二日阿波丸に乗船出航。翌日午後門司に着き、廿六日朝八時上海に着き、廿八日南京に到着した。この旅行は二ヵ月余りで毎日の記事を『扶桑再遊記』一卷とした。羅振玉は在日の間、重点視察や国家首長の訪問を除き、また部中のために日本技師を招聘する以外は、秘籍を求め歩き、黎（庶昌）楊（守敬）両家の遺籍を拾集した。常にその土地、その土地の書店に立ち寄った。東京では島田翰介の紹介で宮内省図書寮に行つて多くの秘本を見、また個人所蔵のものも縦観することができた。ここに述べておかねばならないことが六つある。一は、日本宮内省図書寮において古写本春秋經伝集解全本をみたこと。二は、南宋刊の世説新語三卷本。前書とともに皆楓山官庫（紅葉山文庫）旧蔵。三は、徳富（蘇峰）氏成簣堂において宋刊本盧山記の存卷二三、ほかに三卷鈔補をみる。この書は明初に散佚し、金山錢氏守山閣刊四庫本が僅に前三篇あるのみ。四は貴陽陳氏重刊宋本李唱和集は、中に欠葉があるが、のちにその版は徳清傅氏のものとなり、さらに転じて羅振玉のものとなった。この旅行では、はからずも富岡氏（鉄齋）の桃華庵において一本をみたが、陳氏の刻款式と同一で欠葉分が存在していた。これを影写して帰り補刊した。五は、平子尚の言うには、正倉院蔵の王子安集残卷は唐の慶雲年間の写本で、日本の写本の最古のものであるが、その中には佚文が多い。しかし、參觀を強請するには及ばないとのことである。そこで写影を頼んだ。のち羅振玉は、その中に佚文五を得て、蔣伯斧に贈った。伯斧の父君が王子安集注を著わしたからである。六は、宮内省図書寮において、南宋初刊本文公文公集の目次が明刻本と同じでなく、かつ佚篇のあるのをみつけた。そこで、その目次をノートに記録し、帰ってから合肥（安徽省の省都）蒯禮郷（光典）に示した。蒯は王（文公）集を非常に好んでいたが、宋本を見ることができないのを常に遺憾としていた。帰国したあと、田伏侯は、東京の其旧家に返事した。それは古写本の尚書・孔子伝・周書・洪範等五篇の残卷で、いずれも書法が樸雅な千年物を購入せんがためである。○十月（略）。○殷虚の卜骨が光緒己亥（一八九九年）に出土

してから今年で十年。その間、僅に拓本を集めて『鉄雲藏龜』一編を著わし、世に行われたが、未だ考察する暇がなかった。瑞安の孫仲容（詒讓）がこれに拠って『契文學例』を著わし斯学を開拓した。以前、孫は手紙を寄せて呉れたが、羅振玉はくる年くくる年南北に奔走して著作する暇がなかった。本年、日本の文学士林泰輔が始めての考察を『史学雑誌』に発表し、それを羅振玉に郵送してきた。羅振玉はその賅博さに敬服したが、なお疑問とするところがあり、解決しなかった。そこで、帰宅してから食事後に、すべて篋中から刻辞（甲骨文）の拓本を取り出し、また中州（河南省）の商人の博観より入手したものとくらべて見ると、特に秀れている。また、その発見地が安陽県西五里の小屯であり、湯陰ではないこと、また、刻辞の中に殷の帝王の名諱が十余りあることがわかった。そこで、うっとりとしてこれがまさに殷王朝の遺物で、太卜（官名）の掌るところのものであり、この文字から史学のあやまりを正し、小学（文字学）の源流を考え、古代の卜法を知ることができる悟った。

一九一〇年（清宣統二年、日本明治四十三年）四十五歳

○二月『殷商貞卜文字考』一卷を作って林氏に答え、考察の不十分な個所一、一について分析を加えた。五月、石印印刷にまわし、これが羅振玉の甲骨文字研究の始まりとなった。宝物がうまく保存されることを願う者もなくなり、しかも甲骨は古くて脆いからたやすく消滅してしまい、発見されて十年になるが、今なお世人はその貴重なことを知らない。速かに捜し求めないと、出土の日がすなわち全く滅びてしまう日となる。これらを考察するには多見に頼るほかない。当時、数千の材料を見たが、今や箱の中にあるのは八百枚だけである。ここにおいて、役所仲間の祝繼先と秋良臣とを遣わして、洹水の南岸を探索させたところ、一年間にその数、二万に達した。そのうち贗作のものを取り除いても優に秀れているものが三千余にのぼった。弟子経と婦弟の范

恒齋（兆昌）とが互いに助け合つて拓本をつくつた。机上は卜骨で満ちあふれ、塵が襟にいつぱい溜る有様で、その文字を類別して『殷虚書契前編』をつくり、その考釈は後編とした。○昨年の秋、伯希和（ペリオ フランス人 Paul Pelliot, 1875-1945）に關しては、さきの一九〇九年の条に以下のごとく記されている。○返京後、聞有法国大学教授伯希和者、訪古於我国西陲、於甘肅敦煌鳴沙山石室竊運所儲古卷軸大宗以去、地方官無權過問、當道懵不知、過京、賃宅蘇州胡同、其所得已先運歸國……が昭陵（唐大祖李世民の陵。陝西礼泉県九嵎山にある。）からいくつかの碑が新出したと語っていたが、本年秋、郵便で程知節（旧唐書68、新唐書90）ら四つの碑が得られ、また日本京都大学教授内藤湖南もまた宇文士及（旧唐書63、新唐書100）の碑を加えて呉れた。たまたま数旬の間、痔を病んで自宅に閉じこもっていたので、記録を集めて補遺（『殷虚書契』の補遺）をつくつた。○甘肅省が敦煌の卷軸の護送に当らせた委員の贛人（江西省人）傳某は北京に着き、先ず役所に行かないで同郷の李某の家に宿つた。某は藏書家をもつて知られ、それで日夜、その仲間とともにその（敦煌文書）の逸品をひそかに盗み取り、点数が足りなくなると、卷軸を引き裂いて数目を合わせた。事が露見し、役所の内部で盛んに詰問する者がいたが、傳に近づいて調べることを許されなかつた。伝聞するところによると、事件は証拠なしとされて、追求はやめられたようである。（考えるに、呉昌綬の『松鄰遺札』の中に、張祖廉に送る書があつて、その中で「役所の大官は深く調べなかつた。」と云っている。これは、思うに時の大学総督もまた贛人であつたからであらう。）羅振玉はその事をあらかじめ聞いていたが、役所に（敦煌文書が）ついた後は、見る事ができなかつた。のちに日本の大学教授らが来觀したときに、それに便乗してようやくその大略をうかがい知ることができた。

一九一一年（清宣統三年、日本明治四十四年）四十六歳

正月、『殷虚書契』前編二十卷が完成し、前三卷の影印は国学叢刊に入れた。○二月、田伏侯が日本東京より帰

国して、入手した竹添氏旧藏宋本莊子を羅振玉に示した。前五卷は音義があつて南宋本、後五卷は音義が無く北宋本であつた。伏侯は仲間のために欠本を償い、これを役所仲間の譚篤生に売つた。羅振玉は、すぐに借りて歸つて校勘し、その異同を浙局本に記して刊行した。

七月に四川抗路で事件が起こり、どんな軍隊が四川に入つてきた。○羅振玉はこれを目撃して時局の危険を感じ、禍の起こること遠からずと考え、これを聞くに忍びず、見るに忍びず、出京しようとしたが、沢山物があり、旅行費がなかつた。たまたま日本の友人で所蔵する書画百点を借りて日本へ赴き展覧する者がいたので、これを売却して旅行費にあてようとしたが、長らく何の報知もなかつた。○八月十九日武昌に事変（辛亥革命）が起こつた。湖広總督瑞澂は上海へ逃れ、大局がにわかに変化し、京師の人心は動揺した。穰卿（汪穰卿、当時蜀言報を主宰）は天津に赴き、部屋を空けて待つてゐるから、羅振玉に来るようにいつた。しかし羅は旅費ができなかつたので、これを断つた。廿二日に朝廷は袁世凱を湖広總督とすることを決めた。天津にいた穰卿は丁度夕食中であつたが、この報を聞いて、にわかにその席にいた人々は運にまかせることにした。また、蔣伯斧はまた数日のうちに疫病に罹つて死亡した。袁が再び起用されたが、驕慢で再起し、驕り高ぶり朝命を拒んでいた。

そして朝野の人びとは長いものには巻かれ、何事もないのを幸いと考えた。奕劻内閣が辞職するに及び、袁がこれに代わつた。袁が政権をとるに至り、羅振玉は事務局の急変を覺り、去ろうとしてうろたえるだけでなす術がなかつた。そのうち、友人の中で王静安（国維）だけが図書館で編訳の任にあることを知つた。そこで、兩家はおのおの米塩を備蓄し、万一変事により死に至ることがあつても去ることはしないことをともに約束した。ある日、日本本願寺教主の大谷伯（光瑞）が京都本願寺の僧を派遣し來つた。その僧は、羅振玉が日本へ渡り、住吉駅にある二樂莊を家族の仮住居とするように法主が勧めてゐることを告げた。羅振玉は大谷伯とは未だ面

識がなかった。そのため、その話を進めるによしなく、くずくずして未だ受諾していなかった。しかるに、京都大学の旧友内藤（湖南）・狩野（直喜）・富岡（鉄齋）らもまた来日を勧める手紙を寄せ来り、蔵書は大学図書館に預けて置けばよく、またすぐ寓舎を準備するとあった。

羅振玉はこの事を藤田劍峰に相談した。当時、劍峰はたまたま北京にいた。劍峰の定めた計画に基づいて、京大諸君の約束に応じ、本願寺から担保を入れて書物を運び、到着後にその運賃を支払うことにした。そこで劍峰は先きに帰国してその準備一切をするようになった。羅振玉は、すなわち十月初めに、しばらく都を出ることを請願して、家族とともに天津に赴き、船を待った。当時、大沽はすでに結氷しようとしており、小さな商船の温州丸だけが乗船可能で、わずか千トンであった。時に、羅振玉は王・劉（長婿劉季纓）とともに三家族上下合わせて約二十人で乗船したが、客室はすでに満員で、家族らは貨物倉を仮住居とした。船長は、自分の部屋を羅振玉に譲った。途中風浪悪く、人々は皆嘔吐した。七日に神戸へ着き、劍峰らがすでに出迎えに出ていた。即日、京都の田中村の寓居へ赴いた。東京の文求堂の主人、田中救堂もまた遠くから来て援助してくれ、狩野夫人はお客の朝食や夕食の準備した。書物や無用の長物は一か月を越えてようやく運送されてきた。また重いもの大きなものなどは捨ててしまった。北京を出ようとする時、侍郎（次官）の宝璫臣は、暫らく様子をみて、どうにもならないようになってから行きましようといった。羅振玉は家族を送って、すぐ返ることと答えた。したがって東京について三日、また商船で大連に至り、陸路北京にむかった。着いてみると、皆が大事はすでに去った、とどまる意味はないというので、十日間滞在したのち再び日本へ渡ったのである。

一九一二年（中華民國元年、日本大正元年）四十七歳

日本京都に在り。○一月十二日清帝退位の詔が下った。○京都は旧称山城国。田中村は京都の郷村で静かな景色のよいところである。

三家の家族は多人数で、その家に一緒に暮らすことができなかった。そこで羅振玉は別に家を借り、王・劉両家を住わせた。弟子経は旅して奉天(瀋陽)で教授していたが、彼もまた資金を送ってきてその家族を連れて日本へ来た。はじめ田中村に居住し、のち神樂岡へ移った。三家はともに相ならんでいて、呼べば応えるほどしか離れていず、お互いにすべて故郷の言葉で話し合った。異国に住んでいるが、少しも寂しいことはなかった。ただ、羅振玉の住居のみが少し遠かったが、それでも距離は約百余武(三百尺余)にすぎなかった。三家および羅振玉は毎月食費としておのおの百元(円)を支出した。

畳に机という日本の風俗は、依然としてその古風をとどめていた。窓外に見える山の景色、山にかかる靄(もや)は朝には輝き、夕べには暗く、そのさまは云いあらわしようのないほど壮大で美しい。家のまわりを帯のようにめぐる溪流の水音が日夜さらさらと聞える。この様子を或る人は、「世外桃源」と云いあらわした。羅振玉は、日本語に通じなかったので、日本人との行き来がすくなかった。ただ、京都大学教授の数人とは文字を書いて交際した。しかし、本国での初めての内乱に関して聞くことも尋ねることも出来ず、非常に淋しかった。

○寓居が狭いので蔵書をまた大学に預けた。それで書物を取り出して読むのに不便となったので、藤田劍峰に相談して、別に新居を建てようとした。日本国の法律では、外国人が日本国内に居住して家を建てる権利はあるが、土地を購入する権利はない。そこで劍峰の名義を借りて、市内浄土寺町に数十坪の土地を購入し、四本柱の楼を建て、その半分に家族を住わせ、あとの半分で祖先を祀り、お客や友人と面会した。門の側に小さな蔵を作り、十数本の松や杉、数百本の各種草花や木を植えた。門に扁額を取りつけ、自分の生活のしぶりをあらわす言葉を記して「永慕園」とした。さらにまた書庫一つを建て増した。箱の中に旧蔵している北朝初年の

写本の大雲無想経残卷は、梵・漢両蔵ともに散佚してしまった秘籍であり、日本の松本博士（文三郎）がその文を記録して日本統大蔵経に収めたものである。よって扁額は「大雲書庫」とした。殷虚の甲骨は輸送のために損壊を免れえなかったが、幸いにも拓本が失われずにあった。○本年の冬、旧稿を取り出して再編輯して前編八卷とし、これを先ず工人にたのんで精印にまわした。さらに、続編、後編をつくる予定である。その自序に曰く、「亡国のさいの争乱が起こつて早やすでに一年……天はこの文化衰亡の時に、卜筮の具を出土させ、予もまた僥幸にも生き長らへ、死ぬ程の苦しみに耐えながら、急いで編輯した。……この世の中で誰が自分の書を読んで呉れる者がいようか。たとえいなくても、自分はこの遺文を抱いてみずからの慰めとするのみである。」と。また、みずから「商遺」と号し、部屋の扁額には「殷禮在斯堂」と書いた。これより遂に著述に毎日をおくった。○本年、京都大学総長が藤田劍峰を仲介者として羅振玉を大学講師として招聘しようとしたが、これを堅く断わった。やがて、京都人で羅振玉を招聘して清史館の纂修としようとして手紙を出して来たものがいたが、この手紙は庭の池のそばで焚してしまった。比叡僑居の図に題すの詩に、「故園の薇蕨已に全べて空しく、来つて三山採薬の翁となる。夢は觚稜を續り、涕泪餘り、心は知旧を傷んで半ば瓢峯」、および「六年国を去つて先兆を成す。」（原注 予四十一歳にして都下に至る。言う、この行、能く吾が志を行うや、未だ期すべからずと、六年さらに成す所なし、国門を出でて復た入らず。不幸にして讖を成す。）の諸句有り。王静安も亦た京都に居を室めて、鈴木豹軒（虎雄）の枉贈に答え、並びに君山（狩野）湖南（内藤）の両君に書翰を送った。これらの諸君子に贈った謙遜の句に云う、「邂逅喜んで来る君子の国。登臨還た望む帝王の州。」「故人朝衡の輩に乏しからず、四海相見て竟に弟兄。」「猶お故園の松菊在る有り。能く仲宣楼を賦する無かる可きや。」「及び壬子の歳（本年）の大晦日、事に即して「但だ先人漢臘を知るべし。定めて誰か軍府に南冠を問う。」等の句有り。

京都に在り。三月十三日長孫が生まれる。福成の子。ここに至つて羅振玉は始めて孫を抱き、喜んで、この孫を継祖と名付けた。五月、上海の友人たちが『国学叢刊』を続刊するよう云つてきた。そこで以前のごとく二か月に一冊とし、古籍の外にも新著を加え、王静安が代りに序文を書いた（この叢刊はのちに各自の著書とし、名を『雪堂叢刊』とかえた。共に五十二種ある）。当時、静安が生活に窮したので、羅振玉は編集・校正の仕事を委任し、毎月食費二百元を与えた。秋に、フランスの伯希和が三年来、順次郵便で送つて呉れて入手した、鳴沙石室の唐代人の巻軸本である款古定尚書以下の影印およそ十八種を輯めて『鳴沙石室佚書』をつくり、精密印刷に付した。佚書とは、その書が久しくなくなっていたのが、幸い石室の中に残存していたものである。以前ペリオと写真にとることを約束したとき、端史敏が心よく出資をして呉れたが、のち忠敏が出資をやめたので、羅振玉は上海の商務印書館と話し合つて、忠敏の出資分を償い、商務印書館より出版することし、自分に考訂がまかされた。数年かれ（商務印書館が約束を守らなかつた。それですなわちみずから衣食を節約して独力で考訂を行つた。夏より秋に至る間に、蔵書を考訂して、各々跋尾にそれをつけ加えた。自序に次のように言っている。「この書がなされるにあたり、悲喜こもごもである。今、中国（清朝）は、崩壊し、自分もただ汲汲としてこれをつくり、急ぐこと逃げる者を捕えようとするがごとくである。時代の趨勢をおしはかるに、ついに愚者になるなかれ」と。

英国人の斯坦因（Stein, Sir Marc Aurel 1862-1943）はペリオより一年早く新疆、甘肅の両省で、ひそかに漢晋の簡牘千余点入手して英国に持ち帰つた。羅振玉は、残念ながら未だ見ていない。ついで、フランスの学者沙畹（Chavane, Emanuel Etouard, 1865-1918）がこれが考釈をして本をつくつたことを知り、手紙を沙氏に送り、その影印本を欲しいと云つたところ、ここに沙氏がその手校本を送つて呉れたが、考釈が欧文であつ

たので、訳して読むことができた。そこで王静安（国維）と訂正を加えて編集したのが、『流沙墜簡』である。その出土地はおよそ三か所で、一は敦煌以北の長城、二は羅布淖爾^{ロブノール}北の古城、三は和闐東北^{ヤクカン}の尼雅城^{ニヤ}及び馬咱托拉拔拉、滑史徳の三か所である。敦煌出土のものは皆兩漢時代のもの、ロブノールのものは、大よそ魏末より前涼時代のものであり、ホーテンのそばの三か所のものは、二十余簡にすぎず、年代は考えるべくもないが、その最も古いものは後漢、近々ものは隋唐のものである。区分してみると小学、館数、方技の書三類となり、簡牘遺文各一卷は羅振玉が担当し、屯戍叢殘一卷は静安が担当して、各々考釈をつくり、年末にまで原稿をすすめ、明年二月に至り本になった。

羅振玉は先きに敦煌遺籍中に、唐宋本の『李氏再修功德記』をえて、拓本に欠けてなくなっている百余字を補ったが、それはすでに『敦煌石室遺書』^{（佚）}中に入れている。

一九一四年（中華民國三年、日本大正三年）四十九歳

京都に在り。これより先、昨年劉季纓は日本から帰国し、上海商務印書館編輯の仕事に就任した。そこで弟子経もまた春のはじめ家族を連れて帰国し、上海近くに仮寓した。友人とともに共同出費して古い書店を経営して生活した。たまたま訴訟事件が起こって閉店した。そのあと、また漢口路で蟬隱廬という書店を設けて自活していたが、遂に亡くなった。

二月、『流沙墜簡』を印刷にまわした。○四月、三子の福長が儀徴汪氏を夫人とした。彼女は羅振玉の二番目の妹の女である。

両親を早くなくしているので、羅振玉は大変可愛がったことはすでに述べたところである。福長は時に十九歳。小さいときから賢明で、羅振玉が江蘇師範学校長時代には丁度八歳で、みずから進んで学校においてある教科

書を時間があれば取り出して読み、ほぼその意味を理解しえた。また、藤田劍峰について日本文を学び、常に日本地図にある諸道の地名を暗記していて、これを挙げて劍峰を困らせ、ときには劍峰が答えられず、その膝に伏しながら地名を一つ一つ挙げ、数十百に至っても間違えることがなく、劍峰は頭を撫でて非常に可愛いがった。さらに北京に赴いてフランス語を習い、日本に至ってドイツ語を勉強し、また榊博士（亮三郎）について梵語を習い、仏典やその他の書籍をよく通覧し、梵文学を研究しようとした。また、兄の福成とともに西夏文字も習った。羅振玉が年来、校印した西陲城の卷軸を欧文に訳したのは、皆、福長の手によるものである。○本年、羅振玉の著書は上記の三種（『流沙墜簡』、『茫洛冢墓遺文三卷』、『殷虛書契考釋』）の外になお十二種あり。（『殷虛書契菁華』、『秦金石刻辭』、『唐風樓秦漢瓦當文字』、『四朝鈔幣図録』、『蒿里遺珍』、『歷代符牌図録』、『高昌麹氏系譜』、『瓜沙曹氏系譜』、『西陲石刻後録』、『唐三家碑録』、『統漚刻書目』、『鶴澗先生遺詩』——以上、書名のみ列挙す。筆者注。）

一九一五年（中華民國四年、日本大正四年）五十歳

京都に在り。○正月、丹徒劉氏藏龜墨本に未入の『鉄雲藏龜』を編輯して、『藏龜之餘』一卷を作った。○二月廿四日、福成を連れて墓参のため帰国。この日、まず神戸へ赴き、廿五日、午前八時春日丸に乗船、午前十時出航。廿八日ちようど午後二時上海に着き、白扇路の婦弟范緯君（兆経）の家に行く。○（三月）四日、ちようど夜十二時淮安の西門外につき、城内の老屋に入ったのはすでに一時すぎであった。五日、姑母にあいさつした。六、七兩日、（淮安の南郊外の五里松および県西七十里の西黄莊に至り墓参した。西黄の墓には樹が独り茂っていた。九日、祖先の回忌の冥寿にあたるので、僧を招いて一日中読経をあげてもらい、礼服を着てお客を導いているうちに夜半に至った。羅振玉は僧を招いて読経をあげるのを禁ずることを家法としなかった。十二日、淮安を發つて上海へ返ろうとした。羅振玉のかつての古い隣人の多くは年をとり八、九十になり、日に日に貧

窮して、やぶれた衣をまとい、日によつては食事にも事欠く有様であつた。羅振玉は、このたびの故郷への旅行にあつて三万錢を拠出し、李氏の妹をしてこれを分かち与えた。十三日の夕暮、上海に着いた。静安と樊少泉が来た。静安と羅振玉とは魯衛へ一緒に行く約束をしていた。それゆゑに、その海寧の故郷に墓参してから東へかえり、上海で会う約束をしたのである。この日、少泉から貴陽の陳松山(田)の消息を知つた。松山は、光(緒)宣(統)の間、掌印給事中(六料給事中の長官)という官職についていたが、抗直でおもねることをせず、そのため権貴のものからいやがられた。慶親王が在職中私利を営み国を誤つた罪を調べるようしきりに訴え、また、北洋のまいないを断つた。羅振玉はその氣節をよろこび、古くからの交際ではなかつたが、話せば必ず明け方にまでなつた。国変が起つたが、貧乏のため故郷に帰ることができず、所蔵していた『明人集』数百種を売り払つた。これは、その弟の于常德より得たものであつた。のち、『明人集』は、日本の文求堂の手に歸した。羅振玉はこれを聞いて、また文求堂より買い戻した。

十六日、福成に先きに日本の寓居へ返るよう命じた。廿二日、静安は眼病のため上海に留つて治療することになった。羅振玉はひとり、午後十時、上海から南京行の自動車で浦口へ赴き、翌日、兗州を過ぎ、その翌朝自動車で曲阜駅に到着した。域を距つことなお八里あり、人力車に乗つて行くこと八里で泗水に達した。人の背に負われて渡る。渡り終わると砂上を行くのに苦しみ、丁度小さい川原をこえるようなものである。昼下り入城して勞玉初を訪ねた。廿五日、午前八時、玉初とともに孔子廟(みたまや)にまいつた。翌日、勞篤文(健)(玉初の次子)とともに顔子廟にまいり、廟を出て孔子の墓所にまいつた。城を出るにさいして連日の大雨で泗水を渡ることができず、やむなく兗州をまわり、午後二時ごろ汽車で天津へ赴いた。廿七日昼下り天津に着き骨董店で鉄権一、漢碑拓本三などを買入れた。廿九日、彰徳へ赴こうとして都門を経由するのがいやで、道を保定に取つた。ここは羅振玉が以前、学校を視察したところである。骨董店で漢代の磚誌一、唐代の磚印一などを

買った。三十日彰徳に着く。人和昌棧店で休み、車をとって小屯へ行つた。その地は、郡城の西北五里にあり、東西北の三面は洹水にかこまれている。『彰徳府誌』に「河亶甲城」とされる所以である。宋人の考古図にある古禮器で河亶甲城より出土したものが少くない。最近十数年間において亀甲獸骨は悉く此処から出土している。土人の云うには、甲骨の出土地は約四十畝で、行つてその地を履めば甲骨の文字のないものが、田中に沢山あると。○四月朔日、洛陽へ行こうとしたが、土人で骨董客に古物を売り付けようとする者が沢山集つてきたので、山西出土の三代ものの瓦鬲尊、^か罍（禮器の一つ、玉のさかずき）、土偶各一を購入した。二日正午ちょうどに、洛陽に着く。天保棧に宿泊する。その棧は邙山の麓にあつて、古い塚をはるかに望むことができる。棧の門の丁度前にあたる大塚は、司馬文宣王の陵である。入城して骨董店をみると、古物は寥寥たるものであつた。羅振玉はこの旅行で通つてきた中で、保定が一番民俗が良く、ついで天津、彰徳が、その次、洛陽が一番悪るかつたという。三日、午前六時、車をとって伊闕に遊び、洛水を南へ渡る。十二時すぎ龍門に着く。岸壁に一面仏像の姿を刻んであり、長い間仰ぎ見たので、肩や項が非常に痛んだ。宝陽洞へ行くと、数十人の兵隊が駐在していた。交渉にやや時間がかつたがやつともに入ることが出来た。駐兵はここで飲食坐臥し、仏像の側で炊事をするので、仏像が墨のように黒ずんでいる。老君洞に至ると、仏像の首は多く失われている。聞くところによると、古物商人らが、貧しい子供に錢をやつて深夜にこっそりと掘り取らせたものを、他人に売るといふことである。七日、羅振玉は、雨の中、書店街を歩いて『康熙紹興府誌』を入手した。九日、河南の歸徳より朱集行きの自動車で牛王壩に至り、驪^{らば}のひく車に乗りかえて行くこと七里、また、東段の貨車に乗りかえた。十一日、午前八時上海に着く。静安の眼病は七、八分通り治癒した。十四日、静安と一緒に春日丸に乗船して日本へ渡つた。十七日朝、神戸港に入港し、夕方家についた。羅振玉の今度の旅行は往復およそ五十三日であつた。六月、『五十日夢痕録』を作つた。日本に旅して以来、日本の公私所蔵の古石刻を沢山見た

り、また歐人の著書からや、わが国の商人が域外から買入れたものなどに出くわして、その品目をあらまし記録し、久しく畜積した結果、およそ百四十種になった。それで九月に遂に『海外貞珉録』を編輯した。○吳憲齋（大瀟）は『權衡度量実験考』を著わし、先人未開拓の必伝の書物だと自負した。しかし湖南巡撫の時、補完しようとして果さず亡くなった。羅振玉はその書のあることを知っていたが見たことがなかった。日本に渡ってから、その書物を河井荃廬のところで見て、工人を集めて重刻した。今年遠遊（日本）より帰って遂にこれを印刷刊行して序文を書いた。○秋にはまた用事で上海に至った。○これより先、宣統元年五月、陝甘總督升吉甫（允）は、立憲の阻止を上奏して免職となっていた。三年秋、陝西が独立し革命政權が樹立された。しかし清廷は升吉甫を陝西巡撫に任ずる詔を下した。升吉甫は、陝甘の軍務を監督、甘軍を率いて、革命軍とよく戦い、永寿、邠、醴泉、咸陽の諸州県に進んで連戦連勝した。乾州を攻めようとしている時、宣統帝退位の詔が下り、兵を解いた。しかし、吉甫は旧部下を率いて再び決起を企て、遠く蒙古・日本に援助を求めて連携しようとした。本年、日本へ旅行して、東京深田氏の別荘に寓居した。ある日、文求堂主人の紹介で自分の作った詩文を直してくれるよう求めてきた。羅振玉は一面識もなかったが、ただ先の抗疏のときのことを思い出し、心情は彼に傾いていた。そこで早速、東京に向いて面会し、手を握ってその苦しみをいたわった。吉甫はもとより、素直に感謝した。

一九一六年（中華民國五年、日本大正五年）五十一歳

京都に在り。○正月四日、王静安（国維）は、英人哈同氏（^{ハート}Hartdos, Silas Aaron 1847～1931）の招きに応じて帰国した。その家族はすでに一足先きに、故郷海寧に帰っていた。○二月七日、羅振玉は、三子福蓀を連れて帰国。本来、淮安に赴いて墓参するつもりであった。そのあと、紹興にある先祖の塚がすでに三十年祀る人も

いなくなっているのを思い、遂に旅程を改めて紹に赴く。三月に紹より歸る。○羅振玉は、日本に歸つて以後、玉静安とともに朝夕、研討をおこなつた。静安が日本を去つたので、常に数日おきに必ず手紙を通じた。五月廿三日、静安からの手紙には、「一別いらい五か月、あなたから來た書面は文箱に半寸余りたまっている。また卷紙二束もすでに使い果してなくなつた。その中の十中八九はあなたに出した書面である。二人の互いの書面には別の事も書いてあるが、その半分は學問に關することである。中国ではわれわれにつぐ第三者はいない。今日、紙を新しくかえて手紙を書き、このことを憶つたのである。」とあつた。○六月五日、袁世凱が皇帝位に就かんと謀つてならず、憤死した。柯鳳蓀が北京から書を送つてきて、「元兇はすでに天誅に伏した。遼東も皂帽、歸つてくるか」と尋ねてきた。しかし、答書には、「董卓が郿に築いた萬歲塢が傾いても、なお李郭があるから、時期尚早である。」と記した。○本年、羅振玉は心を尽くして著述し、毎月必ず一種あるいは二、三種の書をつくつた。本年刊行の書物は夥しかったが、以下のごときものがある。『六朝写本禮記子本疏義』（日本田中伯光顯蔵）。『宋本東漢刊誤四卷』（日本福井氏崇蘭館蔵、中土佚書）。『日本古写本悉曇字記』（唐釈知廣撰、中土無伝本、不知何時流入日本）。『北宋景佑本天竺三字源』（日本高山寺旧蔵、其書雖見著録而久佚、獨存於日本、中有欠卷、以日本嘉祿二年僧喜海字源私鈔補之、惜過略）。『南宋本文珠指南図贊』（日本神田氏蔵、南宋臨安衆安橋南街東開經鋪賈官人宅刊、図画極精、中土久佚）。『三藏取經詩話』・『三藏取經記』（前者三浦氏蔵、宋人平話之一種、後者德富氏成實堂蔵、名異実為一書）等。

一九一七年（中華民國六年、日本大正六年）五十二歳

京都に在り、二月、王静安が『殷卜辞中所見先公先王考』を著わした。羅振玉はこれを聞いて、これをぜひ見たいと求めた。静安はその草稿を日本へ送つて寄越した。三月、四子の福葆が山陽李氏より夫人を迎えた。羅

振玉の第四番目の妹の女である。淮安に至り親しく出迎えた。羅振玉は家の事を処理するために、親族を送つて淮安に至り墓参しようと思つたが、胃病のため行けなかつた。そこで処分の条目をみずから認めて、長子福成にもたせて淮安に赴き伝達させた（外集三に詳し）。たまたま日本の医者が羅振玉の病気を診察して、転地療養を勧めたので、たちまちまた上海に赴いた。張菊生のところで「窓齋集古録」の稿を見せてもらった。菊生はこれを印刷にまわそうと思ひ、序文を書いた。本月、『鳴沙石室佚書統編』凡四種を編輯し印刷に付した。六月十四日、安徽督軍の張勳が軍兵を率いて入京した。二十八日、康有為が天津より入京した。七月一日、張・康二人が遜帝（溥儀）を擁して北京で復辟を行い、再び帝位に就け、宣統九年と称した。この事は久しく以前から準備されていたものである。その事に関与していた者は、大半は青島や上海にいた若劉（廷琛）、若勞（乃宣）、若沈（曾植）、若章（樸）らであつた。羅振玉は、はじめは参予していなかつたが、静安は上海に住み情報に通じていて、当時羅振玉と手紙をやりとりしていた。（按するに、五月八日、沈子培が招きに応じて北上した。しかし、その行方は秘密にされた。静安が訪問したとき、家人は蘇州に出かけたと嘘を云つた。これは静安からの手紙による。）三日、段祺瑞は馬廠で軍を率いて張（勳）を討つことを誓つた。六日、馮国璋が總統代理の職に就いた。十二日、段軍が北京を占領した。張勳は東交民巷にある荷蘭^{オランダ}公使館に逃げ込み、復辟は失敗した。静安は十七日の書に、「情勢は大いに変わり、北軍の多くは段祺瑞のもとに歸し、戦闘が北京・天津の間で起ころうとしているが、その結果はおそらく言わずして明らかであろう。北京にきた諸公は皆ただひたすら一死をもつて国に謝せんと思つても、さだめし。曲江の哀」しみ（杜甫の「哀江歌詩」にあるように、少陵の野老が声を吞んで哭した。）、猿鶴蟲沙（戦死者）の痛「みが生じ、何と痛ましいか。」と記されていた。夏、羅振玉は城崎温泉に赴き、帰ると京坂地方はきびしい暑さで、仕事ができず、遂に芭蕉の植えてある窓の下で暑さをしのいだ。三子福長に命じて、所蔵の石墨について新旧本の異同をしらべさせて日を送り、毎日一碑を校訂した。これは福長の手記による。ようやく祭のこ

ろに至って秋風が起こり、そこで仕事をやめた。○本年河北諸省に大水が出て、とくに河北の天津、保定、山東の德州、河南の彰徳が甚しかった。羅振玉は、無用のものを売り払って、賑給しようとして二万元をえた。往年日本の火山による震災のとき、羅振玉はかつて隸書の横額二百を作って、二千元をえたことがあり、今回が二度目である。冬、羅振玉は再び上海に至り、また長子の福成と婿の劉季纓とを遣わして、まず河北に赴き、賑給の支度をさせた。本年の著者は凡そ五種である。一は『夢鄆草堂吉金図』、二は『恒農專録』、三は『茫洛冢墓遺文統補』、四は『六朝墓誌菁英』五は『兩浙佚金佚石集存』。刊行書は、『鳴沙石室佚書統編』のほかに、『鳴沙石室古籍叢殘』の一書がある。零種（こまかいもの）としては、『日本古写本史記殷本紀殘卷』（日本内藤氏蔵）、『影宋槧趙注孟子』（日本徳富氏蔵、覆宋小字附音注本、尚存趙本原来面目、可與微波榭本併行、其佚葉以內藤氏蔵本補之）、『元槧本廬山記』（此書原本五卷、四庫著録不全、佚其大半、日本富氏蔵此足本、欠葉以東邦元祿本互為補足）、『永樂大典本宋吏部條法』（存二卷、日本富岡氏蔵）、『石渠宝笈三編總目』（原本未刊、其大半部稿本、為日本山本氏所得、卷帙過巨、僅印其總目三卷）等。

一九一八年（中華民國七年、日本大正七年）五十三歳

京都に在り。春、病氣をおして福成を連れて国にかえり、上海の紅十字会員とともに保定の清苑にめぐみの品を分った。淡水両県は春に賑給した。○欧州大戦が終り告げた。疫病が非常にはやり、家人にも病人が多く、福萇が肋膜炎をわずらい、四児の婦人李がひどく肺を病んだ。羅振玉も医薬にたしむようになり、心に安んずることができず、雪堂所蔵の金石文字簿録をつづけて完成することができなかった。四児の婦人李は国へかえり医療を受けたがその効なく、六月に淮安でなくなった。羅振玉は、嘗て入手した清の聖祖の書『雲窗』の二字の横額を寓楼にかけて朝夕これを眺めた。そしてみずから云うには、これこそが、明の處士であつた顧云

美の書齋松風寢だと。本年の長夏には、羅振玉は所蔵の古書画を編録し、もって長い晝間を過そうとした。そこで、七目に区分して、天章、天潢、玉碗、景行、資聞、書録、畫録とした。羅振玉は、書畫なるものは、人の觀照につながるもの、學術の役に立つもので、ただ徒に玩賞するのみではないと考えた。秋も夜長となり、病人もしだに回復した。そこで景行・資聞の兩録中の品物を毎日一、二写し、長くかかって帙を成すことができた。題簽に「雲窗漫錄」とした。本月、羅振玉はまた『王子安集佚文』『臨川集拾遺』各一卷を編輯した。(前者東遊得見正倉院所藏子安佚文五首、以畧蔣伯斧、俾刻附其先德子安集箋注後、伯斧欲更求宜都楊氏日本訪書志中佚篇十三首、未及刻而伯斧沒、至是鄉人從神田(喜一郎)獲見正倉院王集之全、凡文四十一首、不見今本者廿首、取核楊志、始知所謂十三首者實僅六首、綜前後所得廿四首、其見今集之廿首、亦校其異同為校記、後者所摭為日本宮内省圖書寮之宋槧王文公集及婦安陸氏統群書後補、凡得詩八章、文六十首)○刊行書には、以下のものがある。『日本古写本史記殘卷』(一、河渠書後半、神田氏藏、二、張丞相伝後半至鄺生陸賈列伝、彼那列入國宝、書法清勁快厲、皆千年前写本)『古写本文選集注殘卷』(日本金澤文庫藏、無撰人姓名、ほか)○日本米騒動事件、京都より起こり、大阪、神戸、近畿および全国におよぶ。

一九一九年(中華民國八年、日本大正八年) 五十四歲

春、家族を連れて国に帰ろうと謀る。日本の友人がこの事を聞き多方面に連携して、吉田山に精舎を建て毎月の仕送りをしようとしたが、これを固辞し、やっと免れることができた。帰国が近づき、東京、京都、神戸、大阪の老人や旧知の人びと数十人が京都円山公園において送別会を開いてくれた。羅振玉は詩を作つてこれに感謝し、かつ別離を次のごとく記した。

「祖筵悵として将に夕ならんとし、暮色何んぞ蒼茫たる、
主人意自ら厚く、賤子情自ら傷む、

憶う滄海の客と作り、荏苒七霜を経たり、

国歩猶お未だ寧からず、歲月逝くこと堂堂、

久しく虚生の愧を抱き、愿しみ言う帰装を理うと、

一昨觚稜を夢む、疑うらくは鵲驚行を綴ると、

又た京洛に遊ぶを夢む、故宮禾黍長けたり、

一心交ごも欣戚、志意方に彷徨、

晨鷄虚枕を警しむ、乃ち知る身は床に在るを、

今日の良き宴会、清觴を揮うに忍びず、

敢えて恤鄰の義を陳す、唇齒相忘る母れ、

矧んや復た外侮に迫らる、胡んぞ舟航を同じうせざる、

邦人遠図に昧く、牆に聞ぐを戒むるを知らず、

霸臣口に關を銜み、憂憤中腸に結ばる、

請う伐木の詩載賡（廣載）棠棣の章を誦せん、

また、小象に題し、日本の友に留別して曰く、

「八年海に浮んで鬢霜を成す、魂夢依然首陽を戀う、

他日盲翁話柄を伝う、小臣墓の先皇に傍える有り、」と。

さぞかし、この時、居宅を浹易に卜して老年を過ごそうとする想いがあつたのであろう。浄土寺町の寓宅を京

都文科大学に寄附し、これを売却して日本に所蔵されている古写卷子本の影印をつくる資金をつくり、内藤・

狩野両博士にその事の経理をたのんだ。その後つづいておよそ十集が刊行された。これがいわゆる京都大学文

学部影印唐鈔本叢書である。その細目はつぶさに上海圖書館編の中國叢書綜錄總目部分にある。（按ずるに、羅振玉は日本に居ること八年、その間、閉戸して書物を著わすばかりは、日本にある秘籍を訪ね求め、これを影印して後世に伝え、黎氏や楊氏の見落したものを拾い上げることのぞんだ。ところが、羅振玉は日本の友人が好意で所蔵しているものを出して示すと、これをともに觀賞したり値段をはかったりし、ある場合は仮りに印を押し、ある場合は題識を書いたという他人の言いつたえがある。誰がこのような根のない噂を流したかはわからない。日本人が鑑定の印章をたのんだときは、一回に三元を受け取り、また、にせの古人名の印をつくって、無名の書画の上に押印して、鑑定の字を書き加えたというものである。溥儀はこのはなしを信じてその自伝『我的前半生』に書いている。これはただ羅振玉をそしめるのみならず、日本人も亦馬鹿者に等しいとするもので、人にだまされているのを悟らないものである。かように溥の左右にいる人びとは羅振玉を極度にわるくいつた。これはわずかに、その一端で、識者の一笑するにもあたらないものである。なお、ほかに、二つの事があるので触れておく。その一は、葉德輝の『書林清話』（九）「部門書肆之今昔」の一条があり、そのあとの方に買書行と題する七言古詩中にある「近ごろ玉簡の利を貪る」という句を記し、「羅某は日本に在って書物を売ったり買ったりして、非常な利益をえた。刊行した『玉簡齋叢書』はひじょうにくわしい。」とみずから注している。羅振玉は先祖の遺産は少なく、これらを庶弟に譲り、役人の安い俸給も古きをたずねるのになくなってしまった。住いを日本に避けてからは収入もなく、良い物売って辛うじて生活費とし、辛苦して書物を著わした。もうけがなかった訳ではないが、これは商人の「本一にして利萬なる」ものとは全く違っている。かつ、先著後売であるのに、葉氏は「著」といわずして、ただ「売」の一字のみを記している。書を著わしそれがやがてもうけになるのと同じになるのだろうか。『玉簡齋叢書』は箱入りの小さな帙で、はじめ精刻ではない。葉氏の言は、思いもよらぬ誉め言葉という他ない。その二は、孟森が上虞の羅氏の刊行した『山中聞見録』の題跋（明清史論著集刊下冊）に、この録は前刊の三四五三卷を欠いていたが、後刊に補足されたと指摘している。但し巻中に『満州国皇帝』という字が出現しているのを疑問としている。孟は、作者は清初の人で、乾隆時代の改定本太宗実録および王先謙の東華録を見ていないことから、遂に羅振玉が偽作したものと断言した。これも亦全く臆測に出た

ものである。○晩春に上海に至り、長樂里に住んだ。すぐに伯希和^{ペリヤ}博士と偶然出会い、乱後再会できて、たがいに飲を尽し、二時間ばかり話がはずんだ。戸外は大雨の注ぐが如き有様であつたが、少しも聞えないように思えた。欧州大戰当時、伯氏^{ペリヤ}は従軍し、ようやくパリにもどり、再び大学の講座に復帰した。○四月、三女の孝純が海寧の王氏のところへ嫁いだ。婿は伯深^{（潜明）}で、静安の長子である。（按んずるに、溥儀の『私的前半生』には妄人の説を信じて、静安の女が羅の子のところへ嫁ぎ、のち生家へかえされた。これが、羅・王二人の仲たがいが生じた原因だとしている。盲人に道の黒白がわからないのと同じである。溥は毎日深宮にあつたころは、左右の妄言だけを聞いて怪しいと思わなかつた。その後の著書でもなお、それをあつく信じて、誤りを正さなかつた。すではばかしくおかしい事となつてゐるのに、溥儀の書物を読んでなお信用する者があれば、さらに一層おどろくべきことである。）○本年二月六日、上海の人力車夫二萬人が給料のピンはねの増加に反対して大ストライキを起こした。○羅振玉は帰国後、胃病が自然となおつた。しかし、あちこち人事が入りまじり、日本で家に閉じこもつて著述に精を出していたのに比ぶべきもなく、本年は『校補徐萬函譜』以外は、『雪堂所藏古器物図録』一編ができただけである。○蔡鶴頤が北京大学の学長で、羅振玉を考古学の教授として迎え、かつ考古学を学問として樹立しようと欲したが、羅振玉はこれを辞退した。

一九二〇年（中華民國九年、日本大正九年）五十五歳

春、用事で青島に至る。○六月、フランス租界秋山街の地を購入して、家を建てた。羅振玉はさきに『海外真珉録』を編輯し、中国から外国へ流入した金石文を記録しようとしたが、その名を悉く挙げることができず、中途でやめた。帰国して年を越え、古器が商船に積込まれるのを見ることが日ましに多くなつた。それらにかつて記録した分を合わすと、その数は二百を越えた。これらを写して一巻とした。とりわけ日本へ流出するも

のが多く、欧米各国はわずかに一、二パーセントである。○九月新宅が完成し、これを名づけて「嘉樂里」とした。寓宅の西の方の三間を書店とし、日本にあつて編印した書物を売った。龐徳公の語をとつて「貽安」を堂の名とし、長子の福成に命じてこれを担当させた。

一九二一年（中華民國十年、日本大正十年）五十六歳

羅振玉はまた天津に博愛工廠を設け、織布、織帶、織巾、織帘、制漆布沙紙の諸科に分ち、四子の福葆に命じてこれを經理させた。○九月、三子の福長がなくなつた。年二十六。福長の字は君楚。積年の病氣がなおらなかつた。福長は学にはげみ、上海にあつて病氣中もお英語と露語を習うのをやめず、遺著は多いが未だでき上つていず、欧文で記したものが沢山あつて整理しにくい。しかし、ちぢめて写定できるものは『夢軒瑣録』三卷とした。日本にいたころ、羅振玉は福長に命じて老成の人々のところへ使いにやらせた。かれらは多くその秀才を愛して呉れたものである。

一九二二年（中華民國十一年、日本大正十一年）五十七歳

○十二月、遜帝（溥儀）結婚。海内の諸遺臣が赴いてこれを賀し、羅振玉も参加した。召されて、出くわした事を言上せしめられ、賞として「貞心古松」の扁額を賜わつた。羅振玉はその殊遇に感激して、遂にみずから「貞松」と号し、或は「貞松老人」とも署名した。

一九二三年（中華民國十二年、日本大正十二年）五十八歳

○近年、羅振玉は宮中のことに深く関つてきた。辛亥の退位後より、小朝廷の体裁はまだ少しも損われていな

かった。毎年下賜されるものは大平のときと同じであつた。しかし民国政府は優待の条件を履行せず、費用をつくる術がないので、宮中に歴代の所蔵品である貴重な古書画、すなわち石渠宝笈、西清古鑑等の書に記録された物品を抵当物件として出した。師傅として陳弢庵、朱艾卿益藩、伊仲平(克坦)の三人の外に英人の莊士敦(Johnston, Sir Reginald Fleming 1874-1938)がいた。総管内務府大臣の耆寿民(齡)、紹越千(英)、宝瑞臣の三人のうち、耆が最も用いられた。のちにまた閩県の鄭蘇龕(孝胥)が用いられ、鄭はまた金息侯を推薦して補佐させた。ここにおいて新旧の二派が生まれた。旧派は権力をかさにきて位階にしがみつき、旧習慣をかたくなに守ろうとした。新派は傲慢で虚勢を張り、旧派よりまさっていると考えていた。金がはじめに陳傳を弾劾し、陳もまた金の弾劾をそのかし、新旧両派の対立は激しさをました。羅振玉はひそかにこれを憂えた。また、ある日、宮中に火事が発生した。伝え聞くところによれば、事件は内監からであつたという。そこで一、近侍を思いやること、二、宝蔵を移すこと、三、よからぬたくらみを防止すること、の三つを上陳した。この第三は、民国政府当局が宮中の所蔵品を垂涎の的とし、在野の巨公某を代表者として次のことを協議させたことを指している。すなわち、三殿所蔵の物品相当額を価五百萬元、さらに清室が民国政府に移譲した文化関係の物品相当額五百萬元、合計一千万元は、英米に返す義和団賠償金の一部より捻出する、ただし民国政府が経理を担当し、清室は毎年その利息金を使用し、全額を支給しないこと。内務府もすでに会って協議した。羅振玉は思った。民国政府は條件を履行せず大いに信用を失っているのに、今すぐには買収を協議しようとする。皇室の所蔵品には自らの所有権があるのに、民国政府が何故干与できるのかわからない。日本が朝鮮を併呑しても、なお李王の私蔵を承認し、李王博物館を建てるのを許したのを知らないのか。日本の強権でもなおかくのごとしである。英米は賠償金をさいて文化の用、すなわち社会の用にあてる。これは、民国政府に返すことではない。民国政府はどうしてこの賠償金を皇室所蔵品を買収する費用とすることができようか。そうであるな

らば優待は、取消の公表を待たずして取り消され、利息金もまたどうして保証されようか。まさに、名は買収だが、実は命令である。まさに理をもってこれを拒み、ともに是非を協議すべきであると。そこで、升吉甫の名をかりて手紙を陳・朱兩傳（伊傳はすでに亡くなっていた）におくり痛切にこれを訴えた。然し、羅振玉はいわゆる外来者であり、たいていは阻止されたし、容易なことではなかった。民国政府のもくろみも亦また実現しなかった。けれども、甲子（民国十三年）の溥儀紫金城追放の挙はここに隠然ときざしはじめていたのである。○鄭蘇龕は決然として内務府の積弊を改めようとしたれば快刀乱麻を斬るがごとくであった。羅振玉は、再び手紙にてこれを諫めて次のように言った。内務府の奥深くその積弊はきわめて深い。人の窺い知ることができぬものがある。今日、外侮内憂ともに顧慮しなければならぬときは、密かに積弊のあるところを察し、徐々に補救を図るべきである。たとえれば庖丁で少しづつ牛を解剖するようなものである。そうでなければ、刃に鋒鈍を残し、再びそれを使うことができなくなる、と。羅振玉は鄭とは古い交友があり、またこれに加えて婚姻関係にあった。（羅振玉の弟子経の次女が鄭の猶子（甥）のところに嫁いだ。）自分では薬石の言と思つたが、鄭はあまりこれをよろこばなかった。

一九二四年（中華民國十三年、日本大正十三年）五十九歳

○十月、突然宮門の変にあう。九月廿三日、馮玉祥軍入城。羅振玉は朝夕まさに変事が起ころうとしているのを覚り、同僚とともに内務府に至り、対策を練つた。しかし羅振玉はともに謀りがたいことを知った。時に京津線はすでに不通となつていた。羅振玉は、日本公使館に赴いて相談し、翌朝車で天津に帰ることにし、また事あらば電報で知らせられるようなのでおいた。その後、家につくと電報がきていた。それには、馮軍が宮中に入つて優待条件の修正を迫り、かつ三時間以内に宮中よりを出よとあり、要求に従つたあととはどうなる

か、それは未詳である、とあつた。羅振玉はよい考えもつかばず、そこで日本の駐屯軍司令部に行き、段祺瑞に面会できるよう仲介を要請し、大義を説いて暴動を止めるよう頼もうとした。しかし、段は自ら会うことをことわり、丁問樸（主源）を代りに会見させた。丁と羅振玉とは、以前からの知りあいであつた。段は羅振玉の意向を打電することを承諾した。翌朝都へ入り、遜帝はすでに北府（溥儀の父醇親王載灃の寓所）へ移つたのを知つた。聞く所によると、貝勒載潤、紹英、耆齡、宝熙らとともに皇室善後委員に任じられ、民軍と折衝するよう命じられた。このことは羅振玉自ら『集蓼編』に記している。十一月三日、（北府より）日本公使館へ移る。その始末は羅振玉がみずから記している。変の後、左右の諸人の意見は一つでなかった、みずから尊号を取り消し、優待を辞することを主張したのが、禍をまねいた端緒だという者がいる。また段祺瑞との交友を厚くして、段に優待条件を恢復させることができるというものがある。羅振玉は、いずれも皆枝葉末節の説であり、絶対に実行することはできないと考えていた。○（本年）刊行書には『史料叢刊初編』二十二種、皆大庫史籍を董理写定したもの、『貞觀政要殘卷』（日本古写卷子本存五、六兩卷、可訂正元戈直集論本衍奪、且補逸文）、『帝記』、『臣軌』各一卷、『臣軌校記』一卷（皆拠日本寛文本、惟臣軌别有日本弘安十年一本當中土至元廿四年、存同体至匡諫凡五篇、可勘正寛文本脱誤不少、故附校記）等。

一九二五年（中華民國十四年、日本大正十四年）六十歳

二月朔、遜帝（溥儀）は、人目につかぬ服装で、天津に來た。羅振玉は子の福葆とともに隨行した。はじめ日本の大和旅館に入り、つづいて前湖北提督張彪の別荘「張園」に移つた。数月来、孽仍繁が仲介となつた。羅振玉は民党と交際が厚く、その内心は測り知れず、斥けて近づけないようにするべきであるという者がいた。さらに事實をはしたなく捏造し、公然とこれを新聞に掲載し、遜帝（溥儀）の目にふれるようにさせた。柯鳳蓀は

ひそかに、よくみずからを戒めるのがよい、と告げた。羅振玉はその言を奇異に思いつつも、生命を君国のためにひたすらささげようと思った。天津に来て、はじめは天津も危険な土地だと考え、日本に游歴しようと思った。ところが、京津および南方の遺臣たちが来ると、しきりにこれを阻止したため、遂に取りやめることになった。北京での善後処理、および天津での事務方を命じられ、ついでまた升允、鉄良、袁大化とともに顧問を拝命し、丁寧なことだったが許されなかった。三人は皆昔の重臣であり、羅振玉も身をその間に投じていた。

○冬、辭職を言上した。

一九二六年（中華民國十五年、日本大正十五年）六十一歳

○四月、五子福頤を連れて上海に赴き、愛文義路誠意里の弟子経の家に寓す。○五月十五日以後に天津に帰

った。○八月廿日、王婿の伯深が病氣のため上海でなくなった。羅振玉は女孝純の不幸を悲しんで、上海に赴いてこれに会った。伯深は弟の高明、貞明とともに、皆静安のものと配偶者莫夫人の産んだものである。莫がなくなつて潘夫人がついだ。孝純は長子の婦として継姑と言ひ争いがあり、召使いの女が中途より関与しだした。静安は家の主人であつたが、平生の家政は皆潘夫人が主宰した。（静安は自分で念を入れて調べず、羅振玉のごとく事大小となく皆念を入れて調べる点で同じではなかった。こうして伯深がなくなった。静安夫婦は上海に至つて喪を主宰した。潘の善後処置が當を失しているとして、孝純はこれを羅振玉に訴えた。羅振玉は怒を静安にうつし、嫁の言葉を聴いた。しかも静安は隠忍してみすから弁明しなかつた。羅振玉はにわかに離縁された孝純を連れて歸つた。（孝純は二人の女子を生んだが、ともに夭折した。静安はその弟高明の子慶端を嗣子としたが、のち慶端も亦夭折した。）これより遂に静安と情誼において遠ざかり、北京・天津の間はきわめて近かつたが、静安がなくなるまで再び面会することがなかつた。文通も亦稀であつた。伯深は海関に務めており、没後、恤

金があつたが、羅振玉は孝純をして収受させなかつた。(按んずるに、羅・玉の仲たがいについては、外部の者はその内情を知らず、種々の憶測を生じている。王の女が羅に嫁いで離縁されたというが、実は羅の女が王に嫁ぎ、婿がなくなつて離縁されて帰つたことによるものである。静安が湖に投身自殺したのち、人としての本分をけがしたことを疑うことが益々大きくなり、遂には返債に迫られて死んだということになった。その真情は王門の子弟でもわからないもので、外部の者、さらに溥儀でもいかに論じて同じである。)

一九二七年(中華民國十六年、日本昭和二年) 六十二歳

○年来、南方の勢力が北に及んできた。羅振玉は同志数人とともに毎日憂えつつ朝廷に出て、釜中の魚、幕にかかつた燕よりも危いと考へた。○五月三日静安(王国維)が憂憤のあまりみずから頤和園にある昆明湖に身を投じた。懷中に遺書一紙があり、みずから死志を明かにして云うには、「五十之年、只一死を欠く、此一変を經、義に再辱無し」と。羅振玉は年来静安と疎遠であつたが、もとの君主に忠を致す心は、ともに固く信じ誓ひ、終身一つであつた。「再辱」云々は、自本にある「君辱しめられれば臣死す」の義である。静安には臨終のさい皇帝に奉る遺書がなかつた。そして死後恩計を乞ふことをほとんど欲していなかつた。そこで羅振玉はこれを代作した。……本月および六月、羅振玉は二度都に入つて弔いに赴き、さらに其の喪を經記し、静安伝二千余言を作り、兩人の遇合および静安一生の学問経歴を敘述した。

一九二八年(中華民國十七年、日本昭和三年) 六十三歳

○五月、静安の遺著四集ができた。計四十三種、百三十卷、また外集四卷。○秋、人に頼んで旅順の新市街に新居を建てた。『殷禮在斯堂叢書二十種』を編輯刊行す。其中には……『宋人説部冷齋夜話』、『續墨客揮犀』

の両書（前者、汲古本多誤、郷人（羅振玉）在海東日、嘯靜安取日本五山板覆本校之、補兩条、改正數百字、後者、靜安庚辛之間讀書記中有詳考）がある。○十月、天津の家を売った。時に歷年税金の未納が多かった。家を売って得た六万で負債をつぐない、その餘りで旅順の新居の建築費とした。再び退職を上奏したが、遜帝（溥儀）に引き留められた。……やがて旅順の家も竣工した。貽安堂および博愛工廠はともにやめた。

一九二九年（中華民國十八年、日本昭和四年）六十四歳

旅順の新居は新市街扶桑町に建ち、將軍山上に在り、表に海、背後は山、山上には帝政ロシアが旅順・大連に掘ったときに築いた喇嘛廟の残基がなおある。市街は遠いので塵やかましさがなく、海山の景色は書齋に近接している。書物が多くて新居に入らず、古い市屋を借りて入れてある。○正月天津に赴いて遜帝（溥儀）の誕生日を祝う。○旅順大連の中国人商店で筆墨南紙（南シナ産の紙）および古籍文具を商っているものがなく、あれば日本人の経営で、ひどく落ちぶれている。金頌清は上海中国の書店主人であるが、これを聞いてその親戚某とともに墨緣堂を大連市紀伊町に設けて、古籍や筆墨南紙を販売した。古籍の注文少く、ほとんど筆墨南紙ばかりであった。○七月、藤田劍峰が日本東京でなくなつた。劍峰は大正九年（一九二〇）文学博士を授けられ、先後して早稲田、東京、台北の各大学で教鞭をとり、台北大学文政学部長となる。去年東大に招かれ、交通史を講義せんとして病氣にかかり、ここに至つて没す。年六十一。○墨緣堂の主人が廃業しようとした。これを惜しむ者もあり、相談の末、羅振玉が経営をつぐことにした。たまたま中国本土の親友で失業した者が来て、羅振玉に職を斡旋するように求めた。これを引き受けざるをえなかつた。やがて姑が承諾し、店内の仕事を受持たせ、四子の福葆にこれを経営させた。しかし売れるのは筆墨南紙のみであつた。（按ずるに溥儀の「我的前半生」には、墨緣堂を目して羅振玉が経営する古道具屋としているが、これも誤信妄伝で、事實ではない。）

一九三〇年（中華民國十九年、日本昭和五年）六十五歳

元旦に七絶一首を試筆した。天津に赴き遜帝（溥儀）の誕生日をお祝いする。清の列帝御書および御製集を遜帝に進上して、賞として「研精綈帙」の扁額を受けた。○春、旅順大連の日中文化協会は考古学についての講義を頼んできた。羅振玉は、清朝學術の源流概略について講義した。金州の人士がまた文廟明倫堂において講義するよう頼んできたので論語義を講じた。月に二回の集りで、およそ三か月で、事情があつて中止となつた。

金州は、もとの明の金州衛で、旅順口の北一百三十里にあり、清朝の時には副都統がここにいて、使者がどんな集つてきて大いに賑わつた。○冬、三十余年来、ためてきた金文の墨本や、後出の未だ著録を経ないものを編輯すると千器を越えたので、五子の福頤に編次および釈文を命じて『貞松堂集古遺文』十六巻とした。

一九三一年（中華民國二十年、日本昭和六年）六十六歳

○北京に赴いて遜帝（溥儀）の誕生日を祝う。○年来、日本の関東軍司令官が新旧交代のさい、遜帝にあいさつに来るしきたりで、羅振玉はかれとともに東亜の大勢を論じ、中日は唇齒の国であるとした。辛亥革命後、中国は国内がみだれ今日に至っているが、「興滅繼絶」を標榜して望みを貴邦にかけていると語つたところ、彼はこれを聞いて理解した。そこでひそかにともに謀ることができると喜んだ。はじめは、日本帝国がわが国東北部を侵略する野心を早くからもっていることを悟らず、（復辟運動に）手をかしてくれそうにないのに苦しんだ。四月、長孫の継祖が夫人藥山陳氏をもらつた。媒酌人は海寧の沈端臣（繼賢）である。再び天津に赴いて遜帝に謁し、またみずから奉天、吉林に赴いて謀るところがあつた。○『集蓼編』と名付けた自伝を書き上げ、子孫に示した。○柳条溝事変が起こつた。羅振玉はおよそ六たび遼東に渡り、日本側と往復折衝した。その

結果、遜帝（溥儀）を君主として東行するのを迎えることに決定した。羅振玉は天津に赴いて面奏したところ、遜帝（溥儀）もその意を動かした。十月二日、遜帝（溥儀）は、鄭蘇龕（孝胥）およびその子の讓于（垂）とともに日本の船に乗って渡海した。出発前におそらく阻止を受ける恐れがあった。侍従や近臣らは皆そのことを告げなかったが、初め奉天に至ることを考えていたのが、あとで始めて營口についてそこから上陸するのを知った。暫く湯崗子の對翠閣に駐在した。これは日本側があらかじめ処置していたものである。さらに、旅順へ移り、はじめ大和旅館にとどまり、のち肅邸へ移った。当初、討議した時は、羅振玉は、政体は大清帝国とし、行政権の自主等の項目を聲明した。しかし、日本側は急に「魚の為に餌を求める」に出て、羅振玉をその方法で欺くことができるとした。ほかの者は皆、漫然と承諾した。日本側代表は天津に遜帝（溥儀）もまた政体主権を主張した。鄭蘇龕は、羅振玉が功を専らにするのを恐れ、その間に威勢をつけ、遜帝に随行してはじめて旅順についた。しかし、遅々として結果をえられなかったので、非常に心を悩ました。陳仁先（曾寿）の日記に拠ると、「鄭の云うには、自分は家売って多くの金を得た。本来、一個のきわめて気立のよい人間で、毎月字を書いて千金の収入があった。今や全く舟が浅瀬に乗り上げたごとく自由を失い、損失をつぐなえない」と。そこで天津にもどろうとしたが、仁先は、（鄭が）さきに邁進したごとく（遜帝の東行に賛成したことを指す）、あとでは沮喪したことを笑うべきだと云った。陳傳に対して、「この事は、羅叔言（振玉）が打ち壊したもので、これより関与しないでおこう。」と語った。陳傳はこれを責めて、この事はどうして羅一人の責任と云えようか。汝は関与せずというが、お「上」（遜帝）に対し何をもってこたえようとするのかと云った。その後、関東軍參謀板垣（征四郎）が遜帝（溥儀）に会い、滿蒙共和国を建て總統制にしようとする意を露わにした。これに対し遜帝は不可とした。しかるに蘇龕は極力主張し、非常に興奮して態度にも烈しいものがあつた。板垣は遜帝に駕を勧めること二度におよんだが、みな拒絶された。ほとんど交渉は破局に近かつた。おそらくここに至って、日

本側は、蘇龕の熱中くみし易いのを利用して、遂に蘇龕の方に転向し、羅振玉を捨てて顧みないようになった。このため羅振玉は、うれいわずらい病気になり、心中きわめておだやかでなかった。遜帝（溥儀）は羅に会い、これを慰めた。このとき詩を作ってこの事を記している。羅振玉は『集蓼編』（自伝）にこの事を記して、「政体にたちまち枝節を生じているのに気が付かず、事機がうまくかみ合っていないかった。」とみずからを責めている。実に羅振玉は当時の世界の局勢に暗く、自分と相手の状況をつまびらかにせず、共同しながらその思いは異なり、ために散乱しつまづき、このような奇しき局面となった。日本側は、もとより早くから程よく両者に対応していたのである。蘇龕はまたみずから「包辨」（とりもつこと）をもつて任じ、「包辨」の二字は蘇龕の用いた原語であり、陳曾寿の書いた『局中局外人記』文史資料選輯第十九輯に見える。今、前後この事件に関することは大半この記録から取材したが、一一注を明記せず。）結局、羅振玉は自分が終始おろか者にされているのをみずから知らなかったのに過ぎない。年末に至って、羅振玉の病気はほぼなおった。○本年『貞松堂集古遺文補遺』三巻ができた。

一九三二年（中華民國二十一年、日本昭和七年）六十七歳

正月、遜帝（溥儀）は旅順にいた。十二日、日本軍部は奉天で会議を開催、蘇龕父子（鄭孝胥と鄭垂）を代表に指定して参加させた。溥儀は、羅振玉を代表に加えて派遣し、かつ帝制の維持を必須とする理由十二か条を親書し、軍部へ手渡すようにさせたが、会議が開かれると、羅は参加できなかった。蘇龕は溥儀よりの伝言の一字も持ち出さず、「皇帝の事は、万事自分に委せてほしい。何事でもやれないことはない。」と大言した。また、その子は板垣（征四郎）に對して、「皇帝は一枚の白紙にすぎない。従つてあなたがた軍部のなすが俚にせよ。」と語った。十八日、板垣は、旅順に至つて親しく溥儀に面会し、「共和」とか、「總統」の語を避けて、相談の結果は「執政」という名儀を過渡的なものとして用い、それからゆつくりと国体を議することにしようと言つ

た。溥儀は次のように言っている、「鄭垂（鄭孝胥の子）が奉天へ赴く前、「大清皇帝」でなければ不可と云っていたのに、帰ってきたら、全く変わってしまい、極力自分に我慢せよと勧める。今や進退きわまり両難の時期にあたり、鄭垂のごとき者が百人いても何の役にも立たない。板垣の言葉は三歳の児童をおだてるようなもので、全然誠意がない。鄭孝胥の説くところは十分日本人を信用し、少しでも猜疑を抱くな、それが事を行うにあたってお互いに感情を傷つけないうえで必要だというのが、日本人側はわれに誠意があるかないかを全然考えない。「皇帝」という称呼は、祖先が今日まで留め遺してきたもので、われ一人でこれを取り消すことなどできない。……」と。そこで、翌朝、溥儀は萬繩杖を遣わしてその意を板垣に告げた。その翌日、板垣は萬に對し、「今回の東省（満州）の事は、皇上（溥儀執政をさす）でなければ出来ないことである。さきに東京で天皇に会った時、一たび担任したもので、もしも実現できなければ、軍部全体が辞職しなければならない。これは皇上にとって最大の不利益となるだろうと恐れている。」云々と、脅すような言葉遣いであつた。溥儀は、このことについて、皆に相談すると、蘇龕（鄭孝胥）は、それに従うよう勧め、聞き入れられなければほとんど立去ろうとする險幕だつた。鄭垂は跪づいて涙ながらに申し述べ、羅振玉は、心配して顔をしかめながら、矢はすでに弦にあり、従つて無理なことではあるが、つとめてこれに應じ、しばらく一年間やってみて、もしも民を救うという初志を達成できなければ、その時に再び引退を謀ればよいと云つた。溥儀はうなづき、その事は決定をみた。数日して、軍部は蘇龕を総理とするよう要求し、また、各部院長名を書き上げた名簿を出して、用人の権は執政にあり、本来これに干与することはできないが、これは単に参考だと語つた。このように実際の用人の権は、すべて軍部にあつた。按んずるに、溥儀はこの時、板垣および鄭父子の内外からの脅しに制せられて、怒ることもできなかつた。そこで陳仁光にこう云っている。「この人物（鄭を指す）は心粗にして胆大に、進むことが有るが退くことがない、どうして総理をつとめることができようか。ただ官欲に溺れて、電報を打つて子や孫を

呼び集める以外には何も出来ない。(子の鄭垂はすでに心がくるい、あやまちも極まったもので、素直に言えば人間ではない。その父親がほとんど何も教訓しなかったあやまちのせいである。自分の数年の心を踏みにじたものだ。)かくまで溥儀が醜いまでに罵っているのをみても、当時の心情をうかがうことができる。後年『我的前半生』を書くさいの鄭と羅(振玉)に対する筆の下し方には軽重、優劣の差があるが、ただこの事に関してだけは直筆を残したのは、当日の情景を未だに忘れることができないからであろう。『局中局外記』の中に、仁先が胡情仲(嗣璽)にあてた手紙でこの事の経過を述べているところがある。すなわち、「鄭はおべっかするだけで、本意を伝えない。叔言(羅振玉)はこの時すこぶる正論を吐いたが、すでに及ぶところではなかった。ただ頭を垂れて自責するだけだった。」と。三十日、溥儀は長春へ赴いた。羅振玉および子の福葆も随従した。先ず湯崗子につき対翠閣に宿泊した。○三月二日、長春に着く。三省の代表が来り迎えた。三日、溥儀が執政に就く礼式が行われた。旧臣らが別に片方に参列して、三跪九叩の禮をする。いたく感激して涙を流さない者はいなかった。また、むせび泣いて、ほとんど声が出ないものもいた。羅振玉は、その様子を詩によんだ。その中に、「朝班に再列して泣涕漣す(涙が垂れ下り)、貞元の旧侶(旧友)は総て華顛(白髪あたま)たり」の句がある。そして、参議府の参議に任じられたが、これは日本軍部によるものである。羅振玉は早くから溥儀に対して、新国家を建設すれば、よろしく勤勉を尊び、心が清く遠慮深く、互いに競い合うことを抑止すべきであつて、私はこれを提唱したいと申し上げた。溥儀はこれに賛成した。そこでこれを丁寧(ていねい)に文書にして差し出した。間もなく、臨時賑務督辦に任命されたが、これまた溥儀の意志ではなかった。そのため羅振玉はこの職に就かず、また辞することもしなかった。羅振玉はすでにその職を受けなかったので、溥儀は常に自分のそば近くに仕えるよう命じた。そこで、敢て遠く離れることなく、当時、子の福葆が秘書処の秘書に就任していたので、遂に東三道街に家を借りた。羅振玉は常に長春旅順の間を往來していた。○四月、齊齊哈爾に至る。五番目

の孫の紹視が生まれた。福葆の子である。○十月、長曾孫の安国が生まれた。継祖の子である。

一九三三年（中華民國二十二年、日本昭和八年）六十八歳

○六月、監察院院長が欠員で、遜帝（溥儀）は羅振玉に命じたが、辞退した。しかし、辞退を許さず従事せよとお諭しで、やむをえず就職した。○十月満日文化協会が成立した。羅振玉は常任理事に任ぜられ、資料を集め影印で『清列朝実録』を刊行する議を首唱した。時に、内藤湖南も日本側の理事としてその議に賛同し、その結果、印刷刊行された。

一九三四年（中華民國二十三年、日本昭和九年）六十九歳

正月、帝制が改革された。羅振玉は大典籌備委員となり、福葆は尚書府秘書官に任命された。○本年内藤湖南没す。祭文あり。湖南は羅振玉と同年生れである。

一九三五年（中華民國二十四年、日本昭和十年）七十歳

六月、七十歳の誕生日、遜帝（溥儀）は賞として『樸学忠謨』（かぎり気のない正直な学問、まめやかなはかりごと）の扁額を下さった。

一九三六年（中華民國二十五年、日本昭和十一年）七十一歳

○羅振玉は日本にいたころ、王静安と古彝器の文字の考釈にあたっていて、その通釈の一書を作ろうと思っていた。……すでにして静安からの書翰が来て、「上海附近では集書は困難で、さきに大雲書庫にあったようなも

のを入手しようとしても、とても得られない。従つて、あなたが所蔵されている拓本を著録するかどうかを論ぜず一編の書物にされるのが一番よい。そうすればこれを求めさえすれば他をさがす煩わしきがない。書物になればくらべ易い。」と認められていた。羅振玉はその言に同意した。しかし支障があつて未だ従事していなかった。ここに至つて年七十を超えてしまい、今自分が作らなければ、将来誰がするだろうか。そこで発憤して、福頤に命じて集めてある拓本全部を分類し、写真にとる作業を監督させ、『三代吉金文存二十卷』を編輯した。九月九日に竣工し、日本の印刷にまわし、夙志を遂げることができた。このように通釈の仕事は一朝一夕のことではなかった。

一九三七年（中華民國二十六年、日本昭和十二年）七十二歳

三月官を辞し、官吏に準じた待遇を受けることになった。蔵書も異状がなく、然るべく置く所ができた。子孫中にも能く読書する者がいたので、羅振玉は引退してもさしあたり十分自分を慰めることができた。そこで遂に旅順に退居し、門を閉めて静かに勉強し、著述をたのしみとした。毎年の春秋の佳日には、必ず長春に赴いて遜帝（溥儀）に拝謁するとともに友人らと懷旧談をして、二、三か月滞在した。これは没するまで変らなかつた。○東北地方の石刻について先人の著録は至つて稀であつた。……羅振玉は内藤湖南のもとで義興魏宮州刺史元景造象記を見たので、速かに人を遣わして拓本を取り、また『韓貞造象記』を入手して帰国した。数年を出ずして、林東にある遼の慶陵から『諸帝后国書漢文哀冊』が出土し、当局はこれを奉天へ移し置いた。契丹の国書は久しく発見されなかつたので、学者はこれを非常に珍らしいとした。羅振玉は箱の中に各種の拓本を準備し終えていたので、福頤に命じて『金石志』六巻をつくらせた。○本年の著書はおよそ三種。……一は敦煌出土の『姚秦写本維摩経詰解残卷校記』。……この書物が出来上つてから、日本の小野（玄妙）博士か

ら、大正大藏經に挙げられている寛永十八年刊本および平安時代の写本が到着した。両本を比較し考えてみると、書名は異っているが僧肇の注はいずれも写本と合致し、間違いがなかった。

一九三八年（中華民國二十七年、日本昭和十三年）七十三歳

去年、中日戦争が起こり、上海附近に戦火がおよんだので、孟康（弟子經の長女莊、字は孟康、親につかえて孝謹、また文学をよくし、羅振玉が以前から可愛がつていた）は、南の潯陽に避難した。九月には戦火は西へ延び、江浙地方は大騒ぎとなった。孟康は上海へ帰ろうとしたがすでに道路が断たれていた。急いで子供幼児をつれて、潯陽の西北三十里の大唐兜に至り、そこで三か月間、戦火を避けた。危険な目にあつたが幸いにも安全であつた。○本年三月、羅振玉はこれを迎えに北方より来て、山齋に留宿すること数十日、その間詩を孟康に贈り、孟康もこれに和しておくつた。孟康は、もともと弱く、帰ってから間もなく、疲労のため病氣になった。羅振玉は見舞のため遼東の人参を送つた。

一九四〇年（中華民國二十九年、日本昭和十五年）七十五歳

正月、日本小川氏蔵の日本古写本『華嚴經音義』を影印した。書迹は非常に古く、中に倭名がはさまつていて、慧苑の書ではないことがわかつた。○羅振玉は七十歳以後体氣が次第に衰へ、冬期には寒さを感じ、咳をし、翌月になつてもなおらなかつた。二、三十歩行くとたちまち胸痛を覚えた。また時々不眠症をわずらい、病狀がいよいよ悪くなつた。しかし、読書はやめなかつた。病をおして『宋木廬山記』の元禄本と内閣本とを互いに校勘して『校記』一卷をつくつた。○春の初、少し風邪氣味で、それがいつまでもなかなかなおらなかつた。二月中旬に至つて突然肺炎を起こし、承祖が臂肉を割いて薬を煎じて進めたのでようやくなおつた。やがて五

月中旬に再び持病の胸痛を起こし、起こったりやんだりした。病中みずから死を予想して詩をよみ「補天浴日竟何をか成さん」の語あり、壬申の事（一九三年の出来事）を引いて一生涯のやましい事だったとしている。十三日に金州の門人孫玉良（宝田）が訪問し来り、従容として応対していたが、夜になって急に発作が起こり、心臓にはげしい痛みがあり、苦痛にうめき夜を明かした。やがて翌朝、午前十時になくなった。

三、あとがき

以上、羅繼祖輯述の『永豊郷人行年録』（羅振玉年譜）を日本近現代史の観点から一読した。周知のごとく、『羅雪堂先生全集』初編(甲)には附録として番禺莫榮宗撰の「羅雪堂先生年譜」が収められ、同上全集の五編(乙)には「雪堂自伝」（集蓼編）が収められている。右の「羅雪堂先生年譜」および「雪堂自伝」（集蓼編）は『永豊郷人行年録』を繙くにさいして欠くべからざる文献であるが、『行年録』は輯述された羅繼祖氏みずから「連続搞了好幾年、苦於資料放失、蒐求不易」云々（『行年録』跋）とされているように、前二者にみえない貴重な記事があり、また薄儀の自伝『我的前半生』を検討する手がかりを提供するものであり、羅振玉の研究および日本近代史研究のうえで見逃すことができず、今後一層精読する必要を痛感した。日本史の側よりする筆者の当面の羅振玉研究の関心は一つには近代日中文化交流史上、とくに京都におけるシナ学の形成・発展との関連があり、二つには、近代日中政治外交史上、とくに清帝復辟の運動と（偽）満州国樹立との関係である。

前者に関しては、例えば『内藤湖南全集』をみても、羅振玉の京都在住中の具体的な関係資料は全く乏しく、今後、内藤湖南以外の漢学者・文人らの資料も発掘しなければならない。当面、薄田桂氏の御教示にもとづいて、内藤湖南ら京大教授陣を大阪朝日から大阪毎日へ抱込むのに活躍した当時の大毎京都支局長岩井武俊氏の日記の調査に取りかかりたく、岩井家の御協力をお願いしている次第である。

他面、政治外交史の方面では、河村一夫氏より、外務省外交史料館には外務省記録「外国官民本邦及鮮満視察雑件 清国之部」、「宣統帝復辟問題雑件」、「旧清皇室関係雑件」、「日滿文化協会雑件 設立関係」、「同 博物館関係」等の史料が存在することを教えられとともにし、なお「支那宗社党の動静一件」なる史料が発見されれば好資料であろうと教えられた。氏自身、早く「前清宣統帝を繞る人々」(「アジア研究」第十六卷第二号、昭和四四年七月)において、すでに如上の外務省記録を駆使して、羅振玉について詳論されていることを知った。しかしながら筆者は河村氏の御教示・御助力をえながら、関東軍関係史料その他外国側史料をも探査して、今後考察を展開したいと考えている。末尾ながら『永豊郷人行年録』を読むにあたり、本学の岩城秀夫、杉本憲司、清水稔の三教授および本学文学研究科楊春貴君の御助力をえた。記して裏心感謝する次第である。しかし、本稿の過誤はもとよりすべて筆者の負うところで大方の御叱正を乞うものである。

(一九九二、一、一九)

